

910.4-N95ㄅ

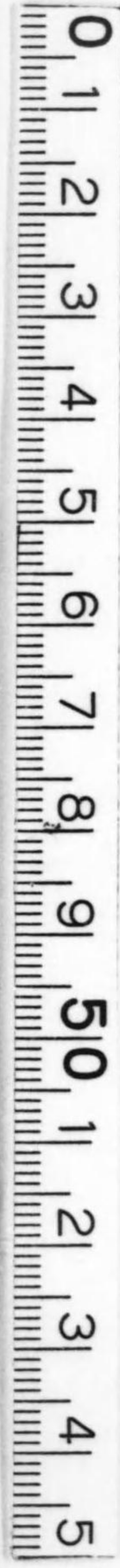


1200500754740

910.4

5

2



始

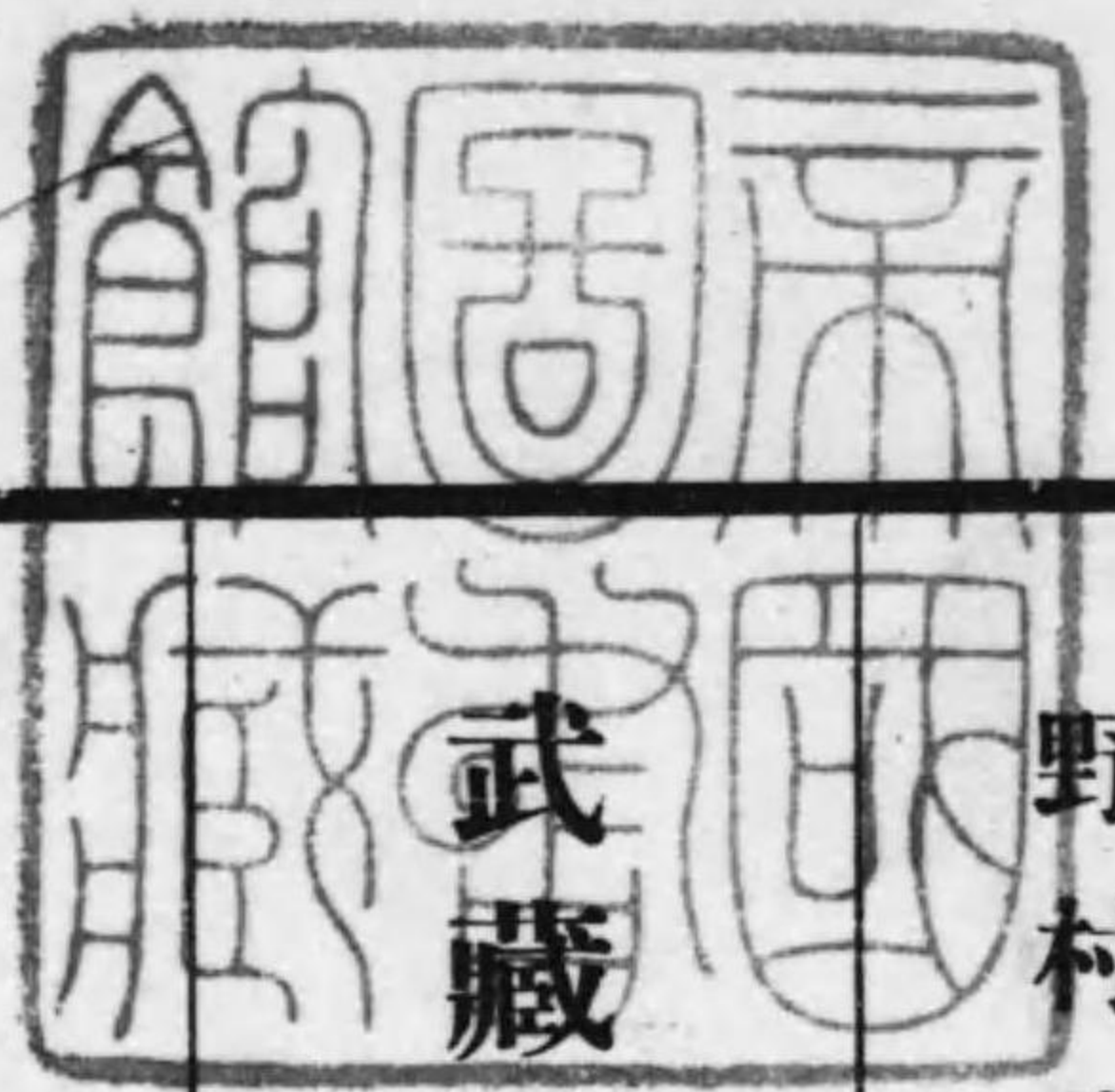


25. 11. 30

AT-872

12

910.4
N95



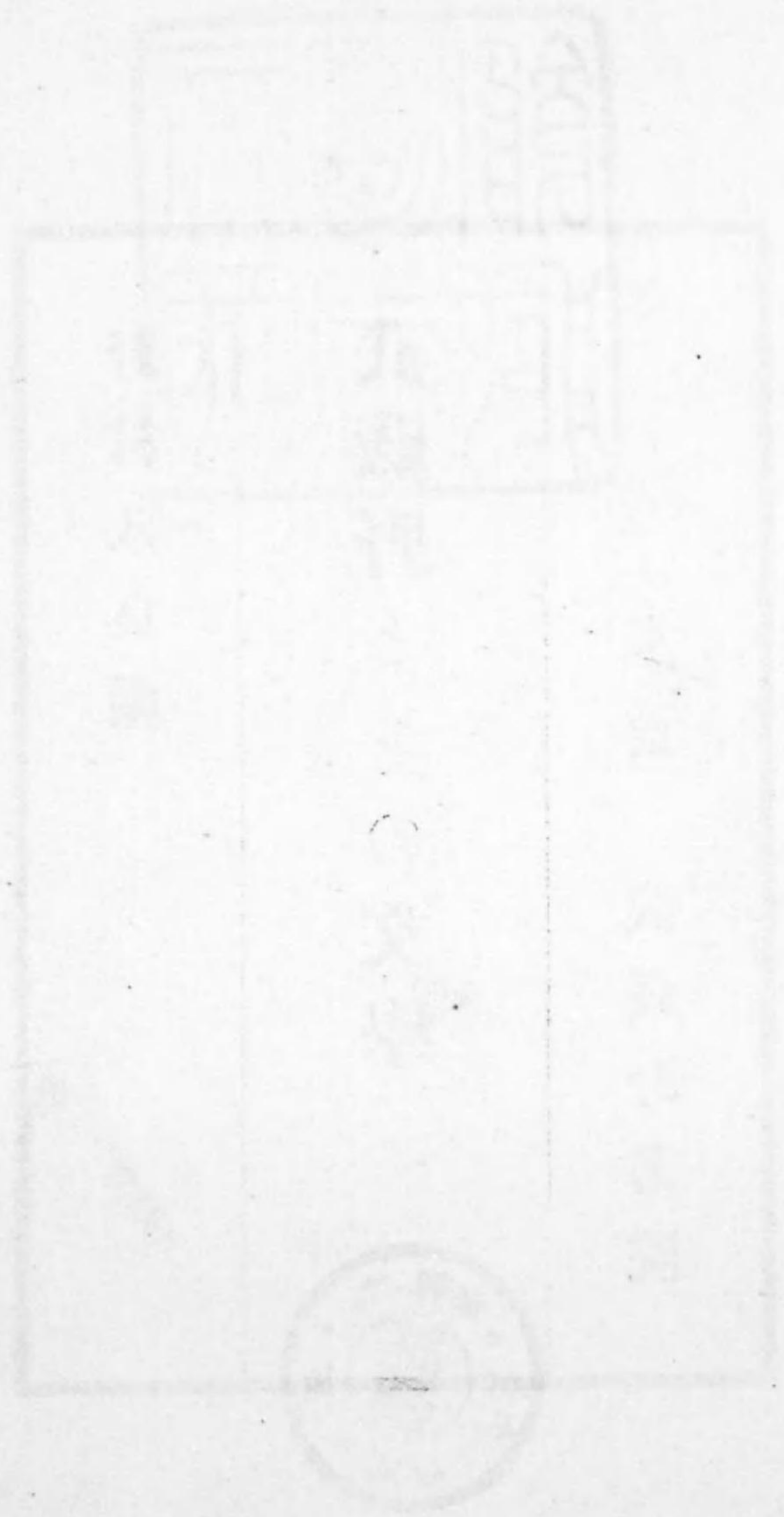
野村八良編

武蔵野とその文學

東京 武蔵野書院



アカコマヲ。
ヤマ又ニハカシ。
トリカニテ。
タマノヨコヤマ。
カシユカヤラム。



568-4

武藏野とその文學

目次

第一篇 武藏野

一 武藏野の名稱及地域

詩材としての原野……………一
 武藏野……武藏の國名……賀茂真淵及本居
 宣長の説……………二
 武藏は當字である……………四
 民間語源説……………六
 ムサシの語源に就いての私見……………アイヌ
 語のムセ……………朝鮮語のモシ……………七
 山海名産圖繪……………九
 古語拾遺……………一〇

目次

鳥居龍藏氏の説……………二
 麻布といふ地名……………三
 追考……………三
 野の語義……………一五
 武藏野の地域……………中日閑話……………一六
 丙辰記行……………江戸名所圖繪……………一七
 新編武藏風土記稿……………一八
 武藏野開墾……………吾妻鏡……………一九
 日本地理志料……………二〇
 廣狹二様の解釋……………二一

一

二 歌謡に現れた武藏野

萬葉集の東歌——多摩川・武藏野・伊利麻路……………二四

赤が花……………二五

いはぬすら……………二七

萬葉集卷二十一——多摩の横山の歌……………三〇

伊勢物語——三吉野の里……………三三

古今集……………三三

紫草……………三四

紫狩……………三五

江戸紫……………三六

ムラサキの語源……………三七

後撰集…………拾遺集……………三八

源氏物語…………古今六帖……………三九

狭衣…………後拾遺集…………屏風繪……………四〇

千載集…………ほりかれの井…………堀兼の傳説……………四二

紫の一本……………四三

淺間堀兼……………四四

新古今集……………四五

新勅撰集……………四六

向の岡……………四七

續古今集…………義經記……………四八

續拾遺集……………四九

新後撰集…………玉葉集……………五〇

續千載集……………五一

續後拾遺集…………新千載集……………五二

新拾遺集……………五三

新後拾遺集……………五四

新續古今集…………新葉集……………五五

宗良親王の李花集……………五六

夫木抄……………五七

つゝきの原…………つゝきの岡……………五八

おほかの森…………駒迎……………五九

武藏野の牧…………にげ水…………武藏名所考……………五〇

諸國里人談……………五一

武藏野話……………五二

ミレージ訃……………五三

六家集……………五四

續詞花集…………雲葉集……………五五

新和歌集…………續現葉集……………五六

爲家卿千首…………師兼卿千首…………堀川百首……………五七

爲忠朝臣百首…………正治二年百首…………水無瀬殿戀五十首歌合……………五八

最勝四天王院障子和歌……………五九

内裏詩歌合……………六〇

内裏名所百首……………六一

月卿雲客妬歌合…………建保五年歌合……………六二

建保七年歌合…………白河殿七百首…………龜山殿七百首……………六三

五百番歌合…………爲相卿千首…………榮雅千首……………六四

正廣三百六十番自歌合……………六五

遠忠五十番自歌合…………和漢名所詩歌合……………六六

人口に膾炙してゐる歌——月の入るべき山もなし……………六七

太田道灌の歌……………六八

古歌と狹山……………六九

連歌……………七〇

川越千句…………竹林抄…………熊野法樂千首……………七一

源氏國名百韻…………春夢草……………七二

壁草……………七三

宴曲の善光寺紀行……………七四

霞の關……………七五

武藏野通路……………七六

唐絲草紙の道行……………七七

謠曲東北の道行……………七八

狂言針立神…………同入間川…………荒御靈新田神……………七九

總……………八〇

武藏野とその文學

近世の歌人の詠……………九五
 戸田茂睡……………賀茂真淵……………九六
 加藤枝直……………同千蔭……………九八
 藤原美樹……………一〇〇
 田安宗武……………松平定信……………一〇一
 本居宣長……………同春庭……………一〇三
 熊谷直好……………横山由清……………一〇四
 三條實美……………岩倉具視……………一〇五
 俳詣……………一〇五
 狂歌……………一〇六
 武藏野の盃……………一〇七
 三 紀行に現れた武藏野……………一〇
 更科日記……………一一〇
 都の菴……………一一二
 北國紀行……………一一三
 廻國雜記……………一一六

東路の菴……………一一三
 東國紀行……………一一六
 武藏野紀行……………一一七
 故田中義成氏の説……………一二九
 日光山紀行……………俳人の文……………鶴衣の武藏野紀行……………一二〇

四 餘言

第二篇 隅田川

一 隅田川の水系及名稱……………一三五
 水系……………一三五
 川名……………一三六
 水系の變遷……………一三七
 他國のすみだ川……………一三八
 二 文學に現れた隅田川……………一四一
 伊勢物語……………一四一
 古今集……………一四三
 今昔物語……………一四三
 葛飾郡……………高田與清の説……………一四五
 都島……………一四九
 更科日記……………中神守節の説……………一五三
 アスマに就いての私見……………内裏名所百首……………一五四

目次

夫木和歌抄……………一五五
 せきやの里……………俊成卿五社百首……………一五六
 壬二集……………爲相卿千首……………慶運法師集……………一五九
 隆祐朝臣百番自歌合……………榮雅百首……………一五九
 連歌……………北國紀行……………一六〇
 廻國雜記……………一六三
 謠曲隅田川……………一六四
 東路の菴……………東國紀行……………一六九
 武藏野の紀行……………一七九
 木下長嘯子道の記……………賀茂真淵の文……………一八〇
 片玉集の女流の文……………一八三
 安藤朴翁の紀行……………北村季文の記……………一八五
 江戸の歌人……………戸田茂睡……………賀茂真淵の納涼會……………一八六
 加藤千蔭……………一八八

武藏野とその文學

小野古道……………二〇一
 村田春卿……村春海……………二〇二
 松平定信……………二〇三
 横山由清……………三條實美……………二〇四
 黒川真頼……………二〇五

狂歌……………二〇六
 俳諧……墨水兩岸行……………二〇八
 俳文狂文……佐田小説……………二一七

三 餘 言

第三篇 多摩川

一 多摩川の水系及名稱

水系……………二二五
 分倍河原……………二二六
 川名……………二二七
 タマの漢字……多水の屯倉……………二二八
 二 文學に現れた多摩川
 萬葉集……調布……………二二九

拾遺集……内裏名所百首……………二二〇
 近世人の和歌……加藤千蔭……………二二二
 村田春卿……横山由清……………二二二
 三條實美……俳諧……………二二三
 狂歌……………二二四
 東海道名所記……六郷橋……………二二五
 神靈矢口渡……太田南畝の文……成島司直の紀行……………二二六
 二子……………二二九

三 六玉川

攝津……………二四〇
 高野(紀伊)……………二四一
 山城……………二四二
 奥州……………二四三
 近江……………二四四

俳文……………二四五
 繪畫……千種有功の詠……………二四七
 俗曲……………二四八
 長唄……………二四九
 琴唄……………二五〇
 舞踊……………二五一

挿

繪

武藏小金井(玉川上水の富士)
 多摩の横山
 堀兼の井
 狭山
 霞の關
 多摩川

目 次 終

秩父嶺に多量の横山かすみあひて

武藏野廣く春は來にけり。

清水濱臣

武藏野とその文學

野村八良編

第一篇 武藏野

一 武藏野の名稱及び地域

詩歌の材料として或原野を捕捉して來る事は、山嶽河川等の場合と同様、上世の民衆が夙に感興を有つた所である。試に萬葉集に就いて考へるに、鹿持雅澄が萬葉坐知佳境に擧げてゐる所に據ると、野と稱するもの七十二件、原と稱するもの二十三件の多きを算するのである。



の原野
の詩材として

さうして室町の季世、月村齋宗碩の藻鹽草に至ると、もはや武藏野に關する詠歌の資料の如きは、約束的に固定した觀を示してゐるのである。

武藏野

武藏の國名

賀茂真淵及
び本居宣長
の説

按ずるに、武藏野とは、國の名をやがて野の名と呼んだことは勿論で、恰も相模野といふのと同類である。そこで勢、武藏と云ふ國名の意義の吟味が必要となる。本居宣長の古事記傳卷七及び卷二十七を閲すると、賀茂真淵及び本居宣長の説を窺ひ知ることが出来る。真淵は、相模、武藏は元來一國で牟佐であるが、それを上下に分けて、牟佐上、牟佐下と云ひ、やがて其のムサガミはムを略いてサガミとし、ムサシモはモを略いてムサシとしたのであると説いてゐるのであるが、宣長は、真淵と同じやうな説き方をして、駿河、相模、武藏の地は元は佐斯の國と云つたらしいが、二分して相模、武藏となり、駿河は後に又

相模から分れたと見てゐる。真淵がムサであると言つたのを、此はサシであると異見を出したのである。さうして相模は佐斯上のシを省いたのであり、武藏は身佐斯の意であらう。其の身と云ふのは、主の意で、畢意武藏は佐斯の國の内に主とある真原の地であるから、かやうに名づけたのであらうと説いてゐるのである。此も真淵と違ふ點である。又宣長は古來用ゐた牟邪志、武藏の字面から考へて、ムサシのサは濁音でなくてはならぬと云ふことも説いてゐる。併し此は平安朝の頃には、清んでムサシと稱へてゐたことは、和名類聚鈔に牟佐之とあるのでも分る。とにかく真淵が相模、武藏は元來一國でムサであると云ひ、宣長がそれを又考へ直して、サシであると云つたのは、共に推測であつて、洵に信用し難い。殊に此の古名サシ説は、古事記（景行

天皇段)の弟橘比賣命の「佐泥佐斯。佐賀牟能袁怒邇。」云々の御歌のサネサシが論據で、サネサシが相模の枕詞であるといふ考から來たのである。併し此の用語例は此の一首の外絶無の觀があつて、内山眞龍の如きは、古事記謠歌註に、此はサネサネシの下のネが脱落したので小寢々々しの意であらうといふ異説さへも出してゐる位であるから、頗る薄弱な説である。蓋しムサシの名は夙く既に存してゐたのであらう。例へば上總國に元、武射と云ふ郡があつた。(今は山武郡となつてゐる。)此ういふ名も本來關係があつたのではなからうか。

武藏は當字である

偕、武藏の二字は、音を假借した當字である。さうして此の二字だけでは、ムザであつて、シの音は表されてゐない。此は清水濱臣が答問雜稿に云つてゐるやうに、和銅六年の詔に、「諸國郡郷名著好字。」

とあり、又延喜式に、「諸國部内郡里等名。並用三二字。必取嘉名。」などとあつて、此も最終の一字を省いた爲であらう。處が、此の武藏と云ふ字面に據つて、日本武尊が武器を秩父岩倉山にお藏めになつたと云ふ故事を云々することが起つた。江戸名所記や和漢三才圖會や江戸名所圖會等いづれも之を載せてゐる。試に一例として淺井了意の江戸名所記の文を出して見よう。

さても此國を武藏と名づけし事は、いか成故かあるらんといふに、あるじのおきなこたへていはく、古き人の物がたりに、この國のうち、祖父が嵩とてたかき山あり。その山の有さま、鎧武者の大にいかつて立たるかたちに似たり。されば人王十二代景行天皇の御宇に、日本武尊東夷をしづめんためとて、この國にくたり給

ひ、かの嵩を見そなはしての給はく、此山のいきをひによりて、此國の人はこゝろのたけき事、餘國にすぐれたるもことほりなり。我今大將軍として、東夷のともがら王命にそむくものを責したがへんがためにくだれり。ねがはくは此嵩の神わが軍をまもるべしとて、みづから所持の武具を嵩のうへなる岩藏にこめて、山神をまつり給ふ。武具をこめし岩藏の國なれば、文字に武藏と書たり。さてほどなくたいらかに國中おさまりければ、今ははや武者武具をさしをくなりとのたまひしより、むさしの國とは名づけたり。

(下略)

民間語源説

即ち所謂民間語源説で、傳會の言、採るを得ないものである。其の他の類の俗説の首肯し難いものが、大橋方長の武藏演露に殆ど網羅し

ムサシの語源に就いての私見

であるから、好事の人は、就いて見られたらよからう。

アイヌ語のムセ等

ムサシの語源に就いては、私見がある。抑、故吉田東伍氏は其の著地名辭書に、舊説を信憑せずして、それは古夷語に基づいたものであらうと疑はれた。そこで予はムサシ特にムサの如き語は、到底固有の國語で解釋の附くものではないと決心して、バチエラー氏のアイヌ語辭典を調べて見ると、ムセ(Musa) モサ(Mosa) モセ(Mose) モウセ(Mouse)等の語があつて、何れも、蕁麻イラクサの義があることが分つたのである。さうすると次には、カラムシ(葶)といふ語が思ひ浮ぶ。唐カラといふ舶來物を意味する語を除いたムシはとなると、アイヌ語のムセやモサ等と偶然一致するやうにもあるので、又日本外來語辭典の如きで調べて見ると、此は朝鮮語の Mosi(葶)の轉訛らしい。それからカラムシ

朝鮮語のモシ

を唯ムシとのみ使つた例は無からうかと考へて行くと、古事記上卷の須勢理毘賣の詠に、「牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾。」のムシブスマが頭に浮ぶ。處が契沖阿闍梨の厚顔抄も、本居宣長の古事記傳も、内山眞龍の古事記謠歌註も、此のムシブスマを蒸衾として、ムシを溫暖な意としてゐる（萬葉集卷四にも「烝被。奈胡也我下丹。」の例がある。）併し其の意味では、次に來る「多久夫須麻。佐夜具賀斯多爾。」の栲衾に相對する語とならぬ。被の形容は兩者各、柔、清の語が副うてゐるから、栲衾に比べては、ムシブスマのムシも、名詞でなくては不調和である。さすがに橘守部だけは、さういふ點に心附いて、稜威言別に之を蟲被で、繭の絹の衾であらうとの説を立てゝゐる。併し未だし、予は芋衾でなくてはなるまいと考へ附いたのである。アイヌ語で蕁麻の

意、朝鮮語で芋の意の語が、とにかくムサシ（武藏）に含まれてゐるであらう。而も次節に出す如く、萬葉集の東歌に、「多麻河泊爾。佐良須氏豆久利。云々」とある、其のテヅクリ（調布）は、和名類聚抄に白糸布とあり、又同書に紵布をアサヌノと訓んでゐるが、紵は説文に、「縹屬。細者爲紵。粗者爲紵。」とあつて、縹は糸の類である。多摩川附近に芋を産し、隨つて粗布を織出したもので、さういふやうな因縁から國名に附いたのであらう。山海名産圖會（關月）卷五に、越後縮の事を言つてゐる條に、此ういふ面白い記事がある。

山海名産圖會

越後連接の國信濃をはじめ、武藏、下總、下野、常陸など、皆古芋麻の多く生せし地なれば、國の名をもそれによりて號くる物、下總、上總、信濃なり。上總、下總是元フサの國といひて、即ち

フサ、アサの轉語なり。又麻をシナといふは、東國の方言にて、今も尙然り。蝦夷人の帶をシナと云木の皮にて作ると云も是なり。信濃はシナムノと云ことにて、專織出せし地なるべし。

古語拾遺

此は武藏の語源を明言してゐないが、予の考の前驅をしてゐる氣のするものである。尙古い資料に溯つて、武總の地と麻屬との關係を釋ねると、古語拾遺の、顯著な記事は、第一に思ひ及ぶ所である。即ち天富命が日鷲命の孫スエを率ゐ、阿波國に穀ユラ麻アサを殖ウケゑ、更に天富命が阿波の忌部を分ち、東土に率ナて往きて又此を殖ウケゑしめた。麻の生ふる所を總フサ（アサの古語フサ）の國と謂ひ、穀ユラの生ふる所を結城ユツキの郡と云ふ、阿波忌部の居る所を安房の郡と名づくところある。それから又延喜式卷二十三 民部を見るに、年料別貢雜物に、武藏國麻子 六斗下總國麻子 七斗とあり、同書卷二十四 主計

に、中男作物として、武藏國麻五百斤、上總國麻二百斤、下總國麻四百斤とある。凡そ武總の地が、古代から麻の類の植物に適してゐた事が、此等の資料で明示せられてゐると思ふ。推考すると、元來此の地方には、麻や苧の野生の物も、多かつたであらう。随つて阿波の忌部も其の繁殖に適ふとして、一層植ゑ弘めたものであらう。

以上は先年予が舊著に縷述した所である。此の武藏語源私考は、其の後抄からぬ反響があつた。即ち批評を加へられた中の尤なる者は、鳥居龍藏氏である。予の著述を讀まれた同氏は、淺草の傳法院で開催せられた武藏野會の席上で、武藏名義考を講演せられ、予の説に多大な賛意を表せられ、重ねて苧の事、殊に朝鮮に於ける紵布の話の詳細に述べられたのである。而してムサシにアイヌ語のムセ、モサ等、就

鳥居龍藏氏の説

中朝鮮語のモシを含有すると云ふは可として、ムサシのシの意義は子即ち種子の義であらう、即ち苧の種子のある所、其の有名な産地と云ふ意味であらうと云ふ事を併せて補説せられたのであつた。此の講演の要旨は、武藏野誌上にも載せてあり、又其の後大正十三年に同氏の上梓せられた武藏野及其周圍にも收めてある。予は同氏の好意に對し、永く感謝の意を抱くと共に、予の論じ足りなかつた點に就いて、推究を怠るまいと心に誓つてゐた。

麻布といふ地名

一體東京の麻布は、古、麻生とも書いて、麻の多く生じた故の名であるといふことは、既に新編武藏風土記稿に見えてゐる所であつて、此はいつも予の念頭に懸つてゐる。麻生といふ地名は方々に其の例を見出すに難くない事も能く知つてゐる。又信濃には蟲生ムシウマといふ面白い

地名さへもある。此の蟲は下の生ウマといふ語との釣合から考へると、苧ムシ生の義に相違無からう。故に此う順々に思ひ廻らして來ると、ムサシのシに意義が有るとすれば、どうも國語の生ウマに當るやうな意味ではなからうか、種子といふ鳥居氏の新説はどうであらうと、首を傾げる事が度々であつた。

追考

近年の事である、永田方正氏の著で、北海道廳の藏版である北海道蝦夷語地名解(明治四十一年再版)を繙いてゐると、石狩國雨龍川筋ウツリカの地名に、

Mose ushi モセウシ 蕁麻アル處

といふのがあり、又同國石狩川左の地名にも、

○ nose ushi オモセウシ 蕁麻多キ處

といふのがある。尙同書には、何々のある處といふ意で、ウシを終に帯びた地名はいろいろ出てゐる。

Kina ushi キナウシ 蒲多キ處

Selani ushi セタニウシ 山梨アル處

Tani ushi タツニウシ 樺アル處

Hu mun ushi フムンウシ 生草多キ處

の類である。バチエラー氏の辭典に、

Ushike ウシケ 場處 Place

とあるのも、同類語として併せ考へられるのである。是に由つて、ムサシはアイヌ語のモセウシ或はモサウシの如きが、約まり轉じた語であらうといふのが、唯今迄の予の推定である。此の追考は中央史壇の

野の語義

大正十一年十二月號で發表した所である。

次に野の語義を辨じようと思ふ。新井白石の東雅には、野は伸る義があるとして、平遠曠濶の意に解してゐる。(狩谷掖齋も其の和名抄箋注に此の説を採つてゐるのである。)處が本居宣長は古事記傳に、野は古語ヌで、沼の意であらうと解してゐる。即ち卑濕の地を指したのである。共に参考には値するけれども、未だ遽に従ひ難いやうである。上田萬年氏の談に、篠(シヌ・シノ)を廣義に見て草叢の意とし、やがて其の生ふる所をヌ・ノと云ふのではなからうか、又豆爾乎波の「の」に「」の如きは、或範圍を限つての所屬の意を示したものである。此等は皆野と云ふ語と相通じる所があるやうに思はれるとの事である。此の説も亦參考に資さなくてはならぬ。因みに、本居宣長は篠を志怒と

云ふのは、細い竹を始として、ス、ヤ、ア、シ薄や葦などにも云ひ、(しのすゝき、あしのしのや等の如く)かういふ類の總名であるのを、専ら小竹、細竹などと書くのは、主たる物に就いてある。シヌの意は、なよやかに靡ふ由であると説いてゐる。又原は、平、廣、張る、開く等と關係のある同一語源の語であると思はれる。日本外來語辭典を繙くと、野ノも原ハも、朝鮮語やアイヌ語と、音韻上の共通點の存するのは、興味のあることである。

武藏野の地域

偕次には、古今の人々の觀た武藏野の地域に就いて、一往紹介して置かうと考へる。

半日閑話

太田南畝の半日閑話に、俗に武州江城西に當り、中野といふ所、其の近所に原がある。是を武藏野と號すると云ふのを駁して、武藏野と

丙辰紀行

いふのは、今江城のあたり、南北西に限つて、皆武藏野といふと辨じてゐるのは、勿論至當であつて、決して一小局部を捉へてさう言ふのではない。武藏野を解して正鵠を得てゐるのは、先づ林羅山の丙辰紀行(此は元和二年京上りの紀行である。續群書類從に收められてゐる。)を推さなければならぬ。其の冒頭に武藏野と題して、

名に負ふ武藏野は、月の入るべき月〔山の誤歟〕もなしといへば、まことにそこばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此國の稻毛、葛西、越谷、岩筑、河越、鴻巣、忍なども皆武藏野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば、毎年爰に成らせ給ふ。

江戸名所圖會

と記してゐる。又江戸名所圖會には、更に詳に記して、

南は多磨郡、北は荒川、東は隅田川、西は大嶽秩父根を限として、

多磨、榊樹、都筑、荏原、豊島、足立、新座、高麗、比企、入間等すべて十郡に跨る。草より出で、草に入る、又草の枕に旅寢の日數を忘れ、問ふべき里の遙なりなど、代々の歌人袂をしほりしが、御入國の頃より、昔に引きかへ、十萬戸の炊煙、紫霞と共に棚引き、僅に其の舊跡の残りたりしも、承應より享保に至り、四度迄新田開發ありて、耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狭山に登りて、四隣を願望するときは、曠野蒼茫、千里無限、往古の狀を想像するに足れり。

新編武藏風土記稿

とある。さうして又新編武藏風土記稿の多磨郡の條には、特に、其野ヲスベテイハ、十郡ニワタリシナドイヘバ、廣大ノコトナリ。其内ニモ當郡ニアル原野ハ他郡ヨリコトニ廣キコトハ論ナシ。

とも書いてある。これと同じやうな趣は、津村淙庵の譚海卷五にも見えてゐる。即ち、

又川越より八王子へゆく間三四里、曠野にして武藏野といひつたふ。是は誠に人家もなく、昔のまゝなるものとおもはるゝとぞ。

とあるのである。

武藏野開墾

序に述べると、武藏野開墾の事を江戸名所圖會に言つてゐるが、それは記録に所見があつて、實は承應以前に既に其の事があつたのである。吾妻鏡卷十八に、「建永二年〔承元年〕三月壬辰、武藏國荒野等、可令開發之由。可相觸地頭等之趣。被仰武州云々。廣元朝臣奉行之二云々。」とあるのは注意すべき事實である。尙武藏野開田評定の事は、同書卷卅四に、「仁治二年十月二十二日丙子。以武藏野、可被

吾妻鏡

開_二水田_一之由。議定訖。就_レ之。可_レ被_レ懸_二上多磨河水_一之間。可_レ爲_二犯土之儀_一歟。將又將軍家御沙汰歟。可_レ爲_二私計_一歟。賢慮猶難_レ被_二一決_一。仍今日。前武州召_二陰陽師泰貞。晴賢等朝臣_一被_二示合_一云々。」とあるので知られる。即ち多摩の流を灌漑に用ゐた様子が分る。又享保度の新田の事の如きは、新編武藏風土記稿多磨郡の條下に委しく見えてゐるから、宜しく参照せられたい。

日本地理志
料

借翻つて、故郡岡良弼氏の日本地理志料卷十六に、武藏の地勢を説いて、

按本州。東至_二下總_一。南臨_二東京灣_一。連_二相模_一。西至_二甲斐信濃_一。北至_二上野下野_一。利根川繞_二北境_一。江戸川限_二東方_一。山脈西來。爲_二秩父多磨諸山_一。地勢隨_レ東關_二于南北_一。平濶數十里。大遶四達。人煙

大日本地名
辭書

相屬。其東南隅爲_二東京_一。皆古之武藏野地也。と言ひ及んでゐるのは、武藏國の平野即ち武藏野であるとの謂に外ならないのである。又故吉田東伍氏の大日本地名辭書には、舊説を綜合して、此う言つてある。

地理上より其の形勢を推せば、南方相模野に隣り、北方利根川に至り、西堺は秩父、甲斐に連なれる高峯峻嶺を仰ぎ、東は江河(利根の諸派)及び海灣を以て相限ると謂ふべき歟。されど是利根水系、坂東平野の一部を指したるにて、本來の大形勢より云へば、八州平野の最廣を擧げて、特に武藏野といへるなり。故に古今遊獵登望の人は、往々武藏野の廣大なるを感興するに、坂東平野全域と同一にして相分つなきことあり。而も狭く取れば、府中、河

廣狹_二様の
解釋

越の間、即ち江戸の西北部に連なれる地、最も平曠莽蒼なりければ、特に指して武藏野と呼ばれ、近世に至るまで、田宅多からず。今や墾破力を餘さすと云ふと雖も、多摩、入間の郡中に、空閑林叢、彷彿として上古草茫の景狀を呈する地あり。

と廣狹二義に解したのである。此の種の解釋は既に江間氏親の遊囊賸記〔古事類苑地部所引〕の如きに、之を爲してある所であるが、とにかく其の説は極めて穩當であると言はなければならぬ。

尙武藏野の通路の事等は、後節に於て、おのづから説き及す所があらう。

二 歌謠に現れた武藏野

以下韻文と散文との兩方面から觀ようと思ふ。

古事記及び日本書紀の歌謠には、武藏野の事は見えてゐない。先づ

萬葉集卷十四東歌の内に、武藏國歌が九首あることは注目しなければ

ならぬ。〔主として萬葉集古義に據り、註を加へて示す。〕

多麻河泊爾。左良須氏豆久利。佐良左良爾。奈仁曾許能兒乃。己

許太可奈之伎。〔多摩川に晒す手作（此までは序の詞）更に「何故に」此の女のそこばく戀ひしいことであらうその意。〕

武藏野爾。宇良敝可多也伎。麻左氏爾毛。乃良奴伎美我名。宇良

爾低爾家里。〔武藏野の鹿の肩骨を灼いて占ふ占に、眞實にも〕

武藏野乃。乎具奇我吉藝志。多知和可禮。伊爾之與比欲利。世呂

多摩川
武藏野
歌
萬葉集の東

爾安波奈布與〔武藏野の小岫が雉(此迄は序)立別れ、去にし〕

古非思家波。素氏毛布良武乎。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。伊

呂爾豆奈由米〔戀ひしくあるならば、袖をも振つて慰めよう、武藏野の朧が花(色といふ詞を起す)色にゆめく出るな、男の歌である。〕

武藏野乃。久佐波母呂武吉。可毛可久母。侍美我麻爾末爾。吾者

余利爾思乎〔武藏野の草葉諸向(此迄は序)彼にも此くにも君がま、にと吾は)身を委ね依つたものな、今更何の水臭い事があらうといふ意。〕

伊利麻治能。於保屋我波良能。伊波爲都良。比可婆奴流奴流。和

爾奈多要曾爾〔入間路の大家が原のいはるづら(植物の名、後に記す。)を引け(ば)ゆるく)と靡き依るやうに、いつまでも吾に伸絶えるなと云ふ〕

和我世故乎。安杼可母伊波武。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。登

吉奈伎母能乎〔吾が夫を何とか云はう、武藏野の朧が花(の)序)時なく常に戀ひしいものなの意。〕

伊利麻治
(入間路)

佐吉多萬
(埼玉)

佐吉多萬能。津爾乎波布爾乃。可是乎伊多美。都奈波多由登毛。

許登奈多延曾爾〔埼玉の津に泊り居る舟の風の強さに綱は断れ絶え)ても、吾が言問ふ問柄の絶えないやうにの意。〕

奈都蘇妣久。宇奈比乎左之氏。等夫登利乃。伊多良武等曾與。阿

我之多波倍思〔なつそびく(枕詞)うなひ(地名)を指して飛ぶ鳥の(此迄は序)到らうと思つてぞ吾が忍びく)に逢つたのであるの意。〕

此等は何れも抒情の歌である。右の内第二、第三、第四、第五、第七

の五首は、武藏野を詠み込んでゐる。其の他のにも、多摩川、入間路

の大家が原、埼玉の津等の地名が見えてゐるのは、注意しなければな

らぬ。さうして武藏野に關して、鹿の肩骨を灼いて占ふ事や、小岫が

雉や、朧が花などを詠じてゐるのは、古俗の一端も窺ひ知られ、又極

めて野趣の掬すべき點もある。就中、朧が花を配する事は、後世迄か

なり影響してゐる。寺島良安の和漢三才圖會山草類には、白朧を「をけ

朧が花

ら」と訓し、其の薬用を説いてゐる。鹿持雅澄の萬葉集品物解卷一には、次の如く見えてゐる。



(本標氏郎太富野牧) 朮

和名抄に、爾雅註云。朮似^ハ薊^ニ生^ニ山中。故亦名^ニ山薊^一也。和名乎介良^ヲ。和名本草に、朮和名乎介良。字鏡に、白朮乎介良とあり。(編者云、橘忠兼の色葉字類抄にも、朮、ヲケラとある。)(中略)小野博、蒼朮は、三葉にして、胡枝子葉の如くなる

ものあり、秋月花開^ク、形薊^{アザミ}花に似たり、白朮は蒼朮より苗も葉も大なり、三葉或は一葉にして、花は白色なり、唐種は各いさゝか異なり、と云り。雅澄按^フに、乎介良と云ふが本よりの名にて、東語に宇家良^{ウケラ}といへるか。集中に宇家良とよめるはまた宇家良が本にて、みな東歌なればなり。後^ニ字鏡、和名抄の頃より訛りて、乎家良^{ウケラ}といへるか。宇家良^{ウケラ}が本なるべくもおぼゆるなり。名義未だ詳ならず。

尙、古今要覽稿卷四百十八にも精細な考證がある。彼の江戸の國學者加藤千蔭の歌文集に、うけらが花と題してゐるのは、其の淵源が萬葉の歌詞に有すると考へられるのである。

いはるづら
次に、「いはるづら」と云ふ植物の考證は、古人もいろいろ説を出してゐるが、白井光太郎氏の考説が最も傾聴すべきものである。それは

大正六年九月の東京日々新聞に、武藏野の植物と題して掲載せられてゐる。大略此うである。

「入間路の大屋が原のいはるづら」の歌のいはるづらは、古來難解の植物として知られたもので、萬葉集古義の品物解には、未詳と書してある。(編者云、但、古義の本註の方には、蔓草としてあるのである。)又荒木田嗣興の萬葉品類抄には、石に匍へる蔓也、石に一面に延びひろがる蔓を云ふなるべしと云ひ、高橋殘夢の萬葉集名物考には、水草の蘭ナならんか、其をかつらとしも云ふは、葉の蔓を云ふにはあらず、其根の繁延するを以て蘭つらと呼ぶなるべしと云つてある。又曾榮の國史昆蟲草木考には、石蘭蔓イムキツルといふ義にや、つらといへる詞は藤蔓の事のみにはあらず、凡そ物の列

る事をつらといふなり、即ち萬葉集に、巨勢山コセヤマの列々ツラツツ又、列樹ツラヤなどのつらと同じ義なり云々とあつて、一定の説はない。然るに、茲に尾張の本草家神波愨氏の著聲括本草には、伯耆にいはひづるといふ方言の植物あることを云ひ、他處の「すべりひゆ」漢名馬齒莧なりと記してある。是亦方言により、亡びたる古名を復活せしめ得た一例である。「すべりひゆ」はひけばぬるくの歌の文句にも相應し、愉快に堪へない。此のいはるづらは上野國の歌にもある。即ち「かみつけのかほやがぬまのいはるづらひかばぬれつゝあをなたえそね」とありて、水草の如くなれど、すべりひゆは濕地にも生ずるので、其の歌のも矢張すべりひゆで差支ないと思ふ。

と云ふので、すべりひゆ(馬齒莧)の説を可としてあるのである。スベリヒユ馬莧は和漢三才圖會の柔滑菜の部に出てゐる。

それから武藏野に關聯したもので、尙、多摩の横山の詠み込まれた

歌が萬葉集に存する。それは卷二十の、

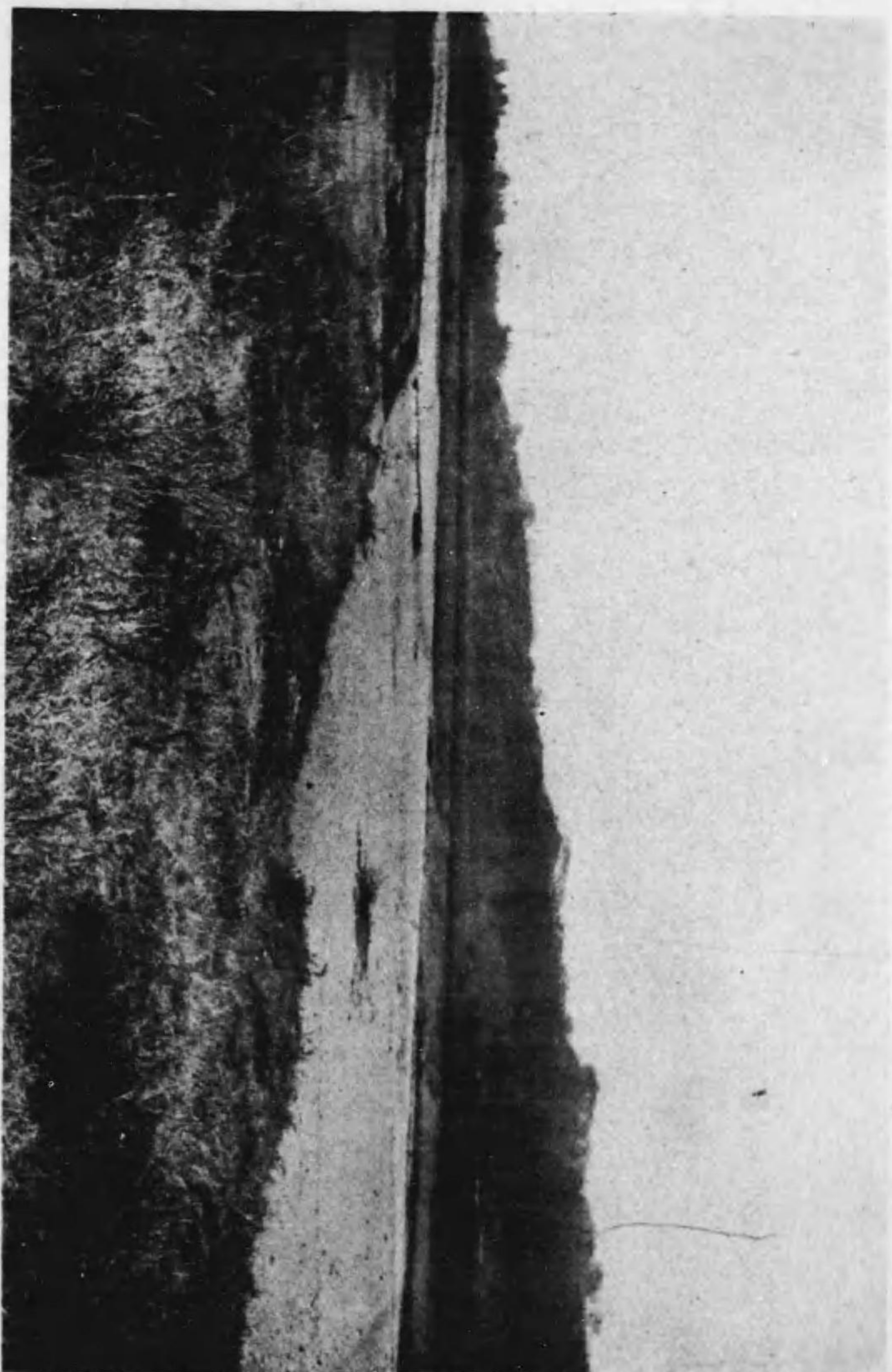
萬葉集卷二十の歌
多摩の横山

阿加胡麻乎。夜麻努爾波賀志。刀里加爾豆。多摩乃余許夜麻。加

之由加也良牟。(赤駒をば山野に放し捕りかゝれて、夫の旅立の間に合は)

で、豊島郡上丁カミツヨホロクラヘシベノ棕椅部荒蟲之妻宇遲部黒女ウヂベノクロメといふ婦人の作であると

傳つてゐる。多摩の横山は武藏野の西に當つた連丘で、八王子市の南を走つてゐる一脈である。現に南多摩郡に横山村といふのがあゝ。さうして畏くも此の度大正天皇の御陵を、此の村の大字下長房字龜ヶ谷戸に定めさせられた事は、世人の熟知する所である。卷二十には右の



(む望りよ原河川淺村山平) 山横の摩多

やうな防人^{サキモリ}や、其の妻の歌がかれこれ收めてあつて、武藏國關係の物も右の外に尙存するが、地名などを詠み入れた著しいのは餘り無い。東歌の九首にしても、又此の卷二十の防人關係の歌にしても、武藏野の中に住んだ上代の人の純眞な聲であることは、今の我等に大になつかしみを持たせる所以である。

伊勢物語

伊勢物語には、武藏國に關する記事が數々ある。其の中に、むかし男、武藏國までひありきけり。その國なる女をよばひけり父はことにあはせんといひけるに、母なんあてなる人に心づけたりける。父はたゞ人にて、母なん藤原なりける。さてなんあてなる人にとは思ひける。此むこがねによみておこせたる。すむ里は武藏の國入間の郡三吉野の里なり。

三吉野の里

みよしののたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよるとなく
なる

かへし、むこがねかへし、

わが方によるとなくなるみよしののたのむのかりをいつかわす
れん

人の國にてもかゝることは絶えずぞありける。

此は後の文學にも多少の影響を及してゐる。さうして其の地は初雁の
名所となつたのである。又、

むかし男ありけり。女をぬすみて武藏國へ行く程に、盗人なりけ
れば、くにのつかさからめければ、女をば草むらの中におきてに
げにけり。道ゆく人、此の野は盗人ありとて、火をつけんとする

に、女わびて、

武藏野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを聞きて、この女をばとりて共にゆきにけり。〔以上二件
群書類從
本に據る。〕

とある、此の歌も亦有名である。古今和歌集には、初句を「春日野は」
として春の部に出してある。それに就いては、諸説のある事であるが、
契沖阿闍梨の餘材抄には伊勢物語の方が却つて古今集の歌を作りかへ
て、所にななへたものかとも疑つてゐる。賀茂真淵も亦同様の意見を
持つてゐた。

古今集

古今和歌集には、次の二首が著しい。それは

卷十五戀歌五、 讀人しらす

第一篇 武藏野

欠

秋風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

卷十七雜歌上、 讀人知らず

紫のひとともとゆるゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る

武藏野に紫を配合するのは之を始とする。但、紫生ふる野の事は、已

に「託馬野爾生流紫」の如

く、萬葉集に見えてゐる。

紫草に就いての諸説は、大

約左の如くである。四時堂

其諺の滑稽雜談卷四に、

蘇恭本草曰。紫草。苗

似蘭香。莖赤節青。二



紫草 (本標氏郎太富野牧)

欠

題しらす

讀人しらす

露霜の上とも知らじ武藏野の我はゆかりの草葉ならねば

卷十六雜歌一

前大僧正慈圓

武藏野の春のけしきも知られけり垣根にめぐむ草のゆかりに

卷十九雜歌四

小町

武藏野のむかひの岡の草なればねを尋ねてもあはれとぞ思ふ

向の岡

此の向の岡は江戸名所圖會に、

今向岡と稱る地は、多摩川を北に帶て、西は關戸より發て、東は
末長に終るもの是なり、連岡の長凡六里あまりあり。

第一篇 武藏野

四七

とある。

續古今集

續古今和歌集には數首ある。卷四秋歌上、

建保三年内裏の歌合に

大納言通方

武藏野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかゝる白雲

此は着想に於て、詞藻に於て、眞に名吟と云つてよい。此のやうに尾花を配する事は、後の物にも影響してゐる。例へば彼の義經記に、辨慶が矢を數多受けた状を形容して、「武藏野の尾花の秋風に吹靡かるゝに異ならず。」とある。

義經記

卷六冬歌

土御門院御製

いづれぞと草の緑もとひわびぬ霜がれはつる武藏野のはら

卷十羈旅歌、

入道二品道助親王の家の五十首に野徑月

正三位知家

むさし野は行末近くなりけりこよひぞ見つる山の端の月

名所の歌よみ侍りけるに

後鳥羽院下野

逢ふ人にとへどかはらぬ同じ名の幾日になりぬ武藏野の原

武藏野の廣いことを「同じ名の幾日になりぬ」と面白く言ひ廻した歌である。

續拾遺集

續拾遺和歌集卷一春歌上、

土御門院御製

春のきる霞のつまやこもるらむまだわか草の武藏野のはら

第一篇 武藏野

四九

此は伊勢物語の歌を本歌と遊ばしたのである。

卷九羈旅歌、

建保五年内裏の歌合に冬夕旅

正三位知家

冬の日の行く程もなき夕暮に猶里遠きむさし野のはら

新後撰集

新後撰和歌集卷五秋歌下、

權大納言師信

あこがれて行末遠き限をも月にみつべきむさし野の原

玉葉集

玉葉和歌集卷八旅歌、

右大臣

旅人のゆくかたづくにふみ分けて道あまたあるむさし野の原

卷十四雜歌一、

欠

欠

おほかの森

低なく續く故に、つゞきの丘の名ありと云へり。

とあるを参考しなければならぬ。又おほかの森を詠んだ光俊朝臣の歌
〔卷二十〕もある。

紅葉散るおほかの森のゆふたすき又めにかゝる山のはもなし

このうたは、武藏野をすぎけるに、山は見えずして、おほかの
もりといふ森ばかりわづかにもみちしてみえけるによめると云
々。

駒迎

おほかの森とは何處であるか今詳でない。光俊に隅田河畔での詠吟の
存する事は後に示すやうである。是或は待乳山を指すものかも知れぬ。
又駒迎を詠んだ源順シタガフの歌〔卷十二〕も見えてゐる。

むさし野の駒迎にや關山のかひうちこえて今朝はきつらん

武藏野の牧

武藏野と馬との關係は、前に示した万葉集の宇遲部黒女といふ女の歌に、駒を山野に放牧した有様が詠まれてゐるので分る。其の後所々に御牧を置かれたので、石川牧、由比牧、小川牧〔小野とも傳へられる〕立野牧などは、夙く延喜式卷四十八に見えてゐるのである。

にげ水

又逃水ニゲミツを詠んだ俊賴朝臣の歌〔卷二十、六所收〕もある。

東路にありといふなる逃水のにげかくれても世をすこすかな

歌には東路と廣い詞が用ゐてあるが、古來之を武藏野の景物としてゐるのである。關八州古戦録に、

其水ハ多摩郡府中ノ六所明神ノ邊ニ在リ、他國ニテ蜻蛉ノ沼、陽炎ヒナカノ水、室ノ八島ナド呼ビ傳ヘタル類ナルニヤ。

武藏名所考

とある。併し此は信じ難い。冕嶠陳人の武藏名所考(文政七年刊)に、

此ういふ説がある。

按ずるに舊説或は陽炎とし、或は行潦とす。然れども源俊賴朝臣の逃かくれても世をわたるかなといへる歌に於いて切ならざるが如し。おもふに本州多摩川のほとり土地墳起せる所にては水地中に伏し、數里にして涌出るものあり、豊島郡石神井村三寶池、多摩郡井草村善福寺池、牟禮村井頭池などみな多摩川の伏流ならんと云説あり、(中略)逃かくるといふ歌に於ては伏流とすることを穩ならめ。

諸國里人談

といふので、合理的であつて、探るべき點があるかと思ふ。併し陽炎説も、古來なか／＼有力である。夙く菊岡沾涼の諸國里人談(寛保三年刊)の如きに、次のやうに説いてゐる。

逝水はまことの水にあらず、むさし野の莽良の草もわかく生たちて麗ウラ、カなる春のそらに、地氣立て、こなたより見れば、草の葉末をしろくくと水の流るゝ如くに見ゆるなり。その所に至りて見れば、その影なくて、また向に流るゝ如く影あり。いづれまでも其所を定めず行ほど先へ行て逝行やうなるゆゑに、かく名付たり。春より夏かけてあり、秋冬はなし。

武藏野話

此ういふ説を承けて、一層委しく述べてゐるものに、鶴磯樵夫の武藏野話(文政十二年刊)がある。其の二編之一に、

一體は原中の氣にして、夜中土地よりむし昇りし煙靄モヤの一面に引わたしたるを、風にて地上に吹しくゆるゑ、自然と白く水の如くみゆるなり。彼方より來る人を見れば、腰より下は煙靄にて見えす。

水中を渡るかと疑へば、此方をもまたかなたにて水ありとおもへるなり。近寄てさきに水ありやと問へば、なしと答ふ。朝辰イッ、ハントキ半刻ころになれば、陽氣盛になり、次第々々にもや消て跡かたもなし。これを逝水といふ。又夕方申半刻ナ、ツハントキ比よりまゝ見る事もあり。前にいへるごとくいづれ原中の氣と知るべし。(下略)

ミレージ説

此ういふミレージ(Mirage)説を主張して居られる。武藏野及其周圍第六頁に、「逝水は無樹帯に起る一種のミレージの様なものと思ふが、このミレージは蒙古平原や大陸に於て常に見る現象である。」と言つてあるのである。とにかく思ふに、彼の信濃なる園原の帯木の如く、ありとは見えて追求し難い意を、歌人として興じたものであらう。

六家集

又一轉して六家集から少しく抜いて見るに、藤原良經の秋篠月清集

に、
雉

武藏野にきゝすも妻やこもるらむけふの煙の下になくなり

僧慈圓の拾玉集に、

早蕨

むさし野の草葉にまじる早蕨をげに紫の塵かとぞ見る

藤原家隆の壬二集に、百首和歌爲家卿
家會

武藏野は分行く草の高ければ末葉の露ぞ雨と降りける

春の歌として

むさし野の萩の焼原かきわけて遠方人の霞みゆくらむ

古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに〔編者云、古今の一句とは、讀

草葉にあらねども秋くる宵は露けか
りけり〕の歌の句を言ふのである。〕

獨ぬる床は草葉の假枕幾夜になりぬむさし野の原

等がある。此等は古歌の詞を踏襲した所に、作者自らも興趣のあるこ
と、考へてゐたらしい。

續詞花集

更に轉じて、群書類從和歌部の私撰集や千首や百首や歌合などに就
いて探つて見るに、續詞花和歌集卷十六雜上に、

清輔四位して侍りける時よろこびいひにつかはすとて

藤原重家朝臣

武藏野の若紫の衣手はゆかりまでこそ嬉しかりけれ

雲葉和歌集卷六和歌中月部

雲葉集

第一篇 武藏野

道助法親王家五十首歌に野徑月

中納言定家

武藏野は露おく程の遠ければ月を衣にきぬ人ぞなき

新和歌集

新和歌集卷六羈旅歌、

野旅

源親行

武藏野や落ちて草葉になほぞおく分行く人の袖の白露

續現葉集

續現葉和歌集卷七羈旅歌、

平貞俊

むさし野や里遠ければ鶏トウの音を草の枕にきくよはもなし

人煙の稀薄な曠野の趣がかなりよく出てゐる。

玄暹法師

むさし野や幾夜の夢のかはるらむ結ぶは同じ草の枕に

爲家卿千首

爲家卿千首雜、

武藏野や誰が宿占むるしるべとて草の末葉に烟立つらむ

師兼卿千首

師兼卿千首に釋教の歌とて、化城喩

むさし野は尙末遠し假初の草の庵に心といむな

化城喩といふのは、法華經第七品の名である。

堀川百首

堀川院御時百首和歌稱三太郎百首一
康和年中

早蕨

右兵衛督師頼

武藏野はまだやかなくに春くればいそぎもえ出る下わらびかな

前齋院河内

武藏野にことしはもえよ紫のわらびは草のゆかりならねど

此等は蕨の題詠に武藏の原野を思ひ浮べた作である。

爲忠朝臣家
百首

丹後守爲忠朝臣家百首に、

木間月

藤原忠成

むさし野のあさぢの原のこくれよりしかわけいづる秋の夜の月
此は野に木立を思ひ合せたので珍しい歌である。

正治二年百
首

正治二年第二度百首和歌、

草花

源家長

むさし野の草におぼめく女郎花つまもこもれるこゝちこそすれ
女房宮内卿

むさしのや色をぞ思ふ藤袴その紫のゆかりならねど

水無瀬殿戀
十五首歌合

建仁二年九月十三夜の水無瀬殿戀十五首歌合に、三十二番霧中戀の
左方、有家朝臣

むさし野やひとりおもひにむせぶかなきつゝなれにしつまもこも
らで

これにも伊勢物語の歌詞を引いてゐる。

最勝四天王
院障子和歌

建永二年の最勝四天王院障子和歌には、武藏野も一名所としてフエ
ボリット サブゼクトとなつてゐる。

武藏野や春はいづくに宿とはん霞も道も末をしらねば

御製〔土御門天皇〕

武藏野の春やく草のゆかりとて烟に深き朝霞哉 慈圓

行末のながめは果もなかりけり霞ぞあくるむさし野のはら

通光

武藏野の春はゆかりもなけれども霞にこもる若草の露 俊成女

霞みても誰にとはまし武藏野のゆかりもしらぬ春の若草

有家

武藏野のゆかりの色もとひわびぬ皆がら霞む春の若草 定家

過來つる野山もうつる程もなし春の日数は武藏野のはら

家隆

淺緑霞むばかりの若草に春もこもれる武藏野のはら 雅經

見渡せば霞ぞなびくむさし野のまだわか草の春風の頃 具親

武藏野や横雲霞む曙に春の影なき色は見えつ、 秀能

即ち何れも春の歌として、霞を詠じ、若草を詠み込んでゐる。「ゆかり」といふ語の多く用ゐられてゐることは、注目に値する。

内裏詩歌合

建保元年二月の内裏詩歌合に、野外春望、十五番、左方、經高朝臣

内裏名所百首

の詩に對して、右方、宗宣の歌、

むさし野や分け行く方はしら雲のとだゆる空のはつかりのころ

建保三年の内裏名所百首は、國々の多くの名所を拉して詠じてゐる一層興味のあるものである。武藏野は秋とし、角太河スミタカは雜としてある。

武藏野の十二首は次のやうである。

綠なる春はひとつのわか草も秋あらはるゝむさし野の原

女房實は順徳院

むさし野や草は皆がらおく露のゆかりもとむる袖の秋風

行意

誰が方によるなく雁の音にたてゝ涙うつろふむさし野の原

定家

あだならぬ色さへ袖にうつりけりゆかりは露の武藏野のはら

家 衡

涙さへぬれそふ袖に蟲の音も亂れてしげき武藏野のはら

俊成女

おもひやる行方は遠き武藏野も眺めにせばき秋霧のころ

兵衛内侍

假庵のつまといふ風も寒き夜にいくよかねなんむさし野のはら

家 隆

月と眺め花と思ふも武藏野の末は皆がら薄霧の空

忠 定

むさし野の浅茅色づく今よりや夜寒の衣雁も鳴なん

知 家

武藏野の霧のまよひのをみなへし妻もこもれる烟とぞみる

範 宗

武藏野や月影ながらしぐれけり尾花がうへの露の下道 行 能

武藏野やいづくの草に妻こめてきのふもけふも鹿のなくらん

康 光

月卿雲客妬
歌合

又同建保三年六月十一日の月卿雲客妬歌合に、野外夏草の題で、栗

下覆勘右大辨藤原定高〔定家卿の事〕の歌に、

むさし野の萩や薄やほりたて、瓜やなすびやうゑてもたばや

とあるのは、狂歌風で珍とすべきである。

建保五年十一月の歌合に、九番、冬野霰、左方、御製

むさし野の草はみながら埋れて霰にのこるさゝの音かな

霰が詠み込まれてゐるのは、注意しなければならぬ。四十五番、冬夕

建保五年歌
合

旅、右方、知家朝臣

冬の日のゆくほどもなき夕暮に猶里とほき武藏野のはら

建保七年歌合

建保七年二月の歌合に、九番、春月、右方、範綱

武藏野や眺むる末の山のはに麓かすめる春の月影

十四番、春野、右方、康光

草枕またやむすばん春の日のかすみてくらす武藏野のはら

白河殿七百首

白河殿七百首（文永二年）に、

霧中野

禪

信

草枕かりそめとこそ契りしに幾夜かへぬる武藏野の原

龜山殿七百首

龜山殿七百首（後宇多天皇御宇）に、

野霞

爲親朝臣

春霞へだつる末はいづくともみてだにゆかぬ武藏野の原

名所野

侍從中納言

我道のためしとぞみる武藏野やなほゆくする限なければ

五百番歌合

天授元年の五百番歌合に、十九番、右方、關白

むさし野はいづくを春の限とも山の端しらで立つ霞かな

爲相卿千首

次に又續群書類從和歌部に就いて見るに、爲相卿千首、名所

秋草の花に分入る武藏野も末までゆかば霜やむすばん

榮雅千首

榮雅千首、霧中野、

宿とはん行末のみか過ぎ來つるあとだに遠きむさし野のはら

正廣三百六十番自歌合

松下正廣三百六十番自歌合に、春秋の部四十四番右、野月

秋の月半は露の光かな千ぐさをわくるむさし野の原

夏冬の部五十一番右、枯野雪

むさし野のすゝき高かやうづもれてあまたの山のならぶ雪かな

十市遠忠五十番自歌合に、二十一番左、野外蟲

・むさし野や音をなく蟲の數々に秋のおもひのはてもしられず

和漢名所詩歌合といふのがある。九條内大臣基家の詠である。其の

趣向は亦興味がある。其の十一番に、

左 梁園

夕占ニ花ニ雪浮レ盡。曉入ニ群山ニ月作レ隣。

右 武藏野

むさし野はあすもいかなる露ならん同じ衣の秋の花染

其の十二番に、

左

霜冷鶴洲松泊夜。鶯吟梁館竹歌春。

右

落積る雪の消えずば武藏野の草葉の下や海とならまし

以上上古から近古迄の歌をいろ／＼と列挙したが、實は此ういふ類

を拾く集めるのは際限の無い事であるから、更に轉じて人口に膾炙し

てゐるものを一往吟味して置かうと思ふ。

むさし野は月の入るべき山もなし草より出で、草にこそ入れ

といふのは、誰もよく知つてゐる所である。此の着想は既に新古今集

の攝政太政大臣の歌や續古今集の通方の歌に存する所である。山岡浚

明アキの類聚名物考の和歌部八には、三の句を「山ぞなき」とし、又「月

人口に膾炙
してゐる歌

月の入るべ
き山もなし
の歌

のかくる、方ぞなき」とも傳へ來つてゐる由を註してゐる。蓋し此の歌は、初から一首ではなくて、連歌であらう。柳亭種彦の用捨箱〔溫知叢書〕に考證して、此う述べてゐる。それは元和頃の物と思はれる扇の草紙と云ふ本に、草より出でゝの歌がある、古い俳諧の附合であらう。さうして元和三年の徳永種久の紀行江戸めぐりにも既に之を引いて、云々と古い歌にも詠まれてゐると云つてゐるとある。

武藏野の詠歌で有名な人は、太田持資入道道灌である。道灌は寛正五年〔野史に、足利家譜、成氏軍記並に六年に作る。〕の春、京師に朝して、將軍義政に見えた。後土御門天皇は詔して、武藏野の事を問はせられた。道灌は乃ち和歌を以て答へ奉つたのである。

露おかぬかたもありけり夕立の空よりひろき武藏野の原

太田道灌の歌

〔都鳥の詠及び「我が庵は」の歌もあるが、今略する。〕處が叙感あらせられて、御製を賜つたのである。

武藏野は刈萱のみと思ひしにかゝる言葉の花や咲くらむ〔野史に、武者物語には「武藏野は菅原のみときしかどかゝる言葉の花に咲くかな」とあると註してゐる。武笠三氏の國民の歌といふ本には、鹽尻に據つて出しているが、それには「刈萱」が「高萱」となつてゐる。さうして異説として、末句に「花もさきける」と註してある。〕

此の逸事は世人の熟知する所である。併し能く考へると、「露おかぬ」の歌は、新後拾遺集の「行末は」の歌と着想が相似てゐるのは、一奇であると言はなければならぬ。因みに道灌の歌集には、慕景集〔群書類〕と花月百首〔續群書類〕とがある。慕景集は其の父道眞の集であるとの説もあることが、國書解題に見えてゐる。又此の頃渡邊世祐氏が史學會で講演せられた考證に據ると、此は道灌に假託した物で、偽撰であるとの事である。花月百首は飛鳥井雅親が批點を加へてゐる。是亦精査

を要すべき書であらう。

古歌と狭山

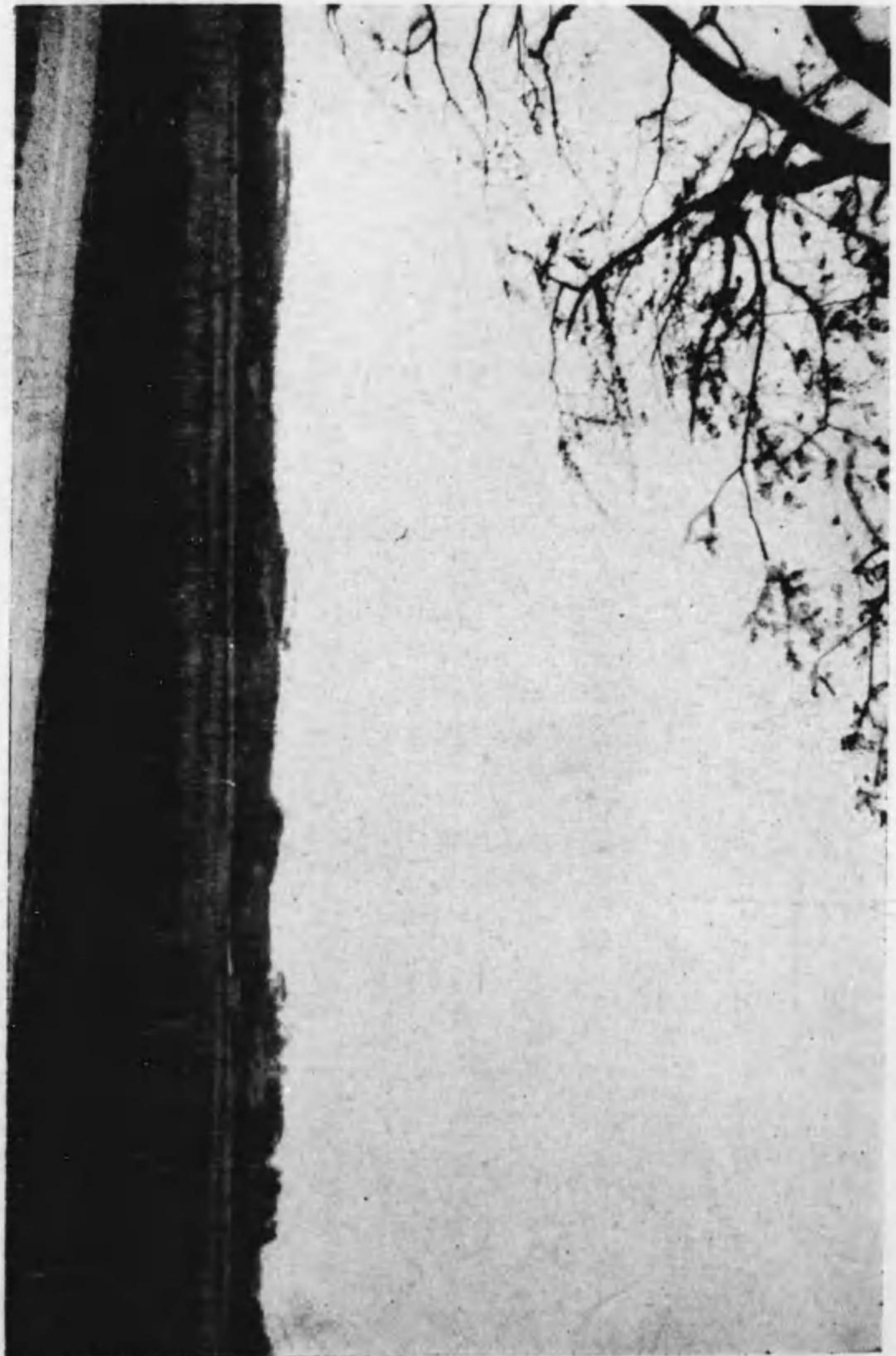
古歌に就いて考へるに當つて、一言附加して置くのは、狭山及び狭山の池である。藻鹽草を見るに、狭山は武藏又河内とし、星、葛、五月にともす火、鹿を詠むとし、狭山池は、武藏なる狭山の池の三稜草、菖蒲、蓴菜を詠むとしてゐる。千載和歌集卷三夏、修理大夫顯季
五月闇さやまの峯にともす火は雲の絶間の星かとぞ見る

新古今和歌集卷五秋下、前中納言匡房

妻こふる鹿のたちどを尋ぬれば狭山が裾に秋風ぞ吹く

此等は果して武藏の狭山を詠じたのであらうか。古今和歌六帖第六、戀すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶えすれ我やねたゆる

新撰六帖題和歌第六帖、光俊



(む望りよ近附楓本三村山村) 山 狭

さやまなる池のみくりのねもみねど打はへ人のくるぞまたる、
此等も果して武藏のを指したのであるか、確には定め難い。枕草子の
「池は」の段に、「狭山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆるにやあら
む。」とあつて加藤盤齋の抄には、之を武藏とし、右の古今六帖の歌を
引證してゐる。狭山は今の北、西兩多摩郡に連亘し、池は^{ハコ}宮の池とも
云つて、西多摩郡箱根ヶ崎村に屬してゐる。而も武藏には、尙大里郡
にも同名の山及び池がある。彼の北國紀行〔^{後に}出た〕に見えるものは、地
理上却つて後者の方であると考へられる。

上來列擧した古歌を一誦して、更に思ひ浮べられるのは連歌である。
連歌はもと和歌の一變じたもので、殊に室町時代に於て、著しく公武
の間に盛行し、其の集の今日に傳るものが少くない。文明元年に成つ

連歌

河越千句

た河越千句には、心敬や宗祇の名が見え、太田備中入道道眞〔道灌の父〕や栗原入道幾弘などが列座の面々である。中に、

かすむいづくぞむさし野のはら

道眞

夕日かげ入間の里はみえわかす

満助

などの句が見出される。竹林抄〔宗祇が宗朝、心敬、行助、專順等七人の中に、

むさし野やかやがすゑ吹く秋の風

心敬

の句があり、

むさし野に天の原なる月更けて

宗朝

の句もあり、さうして又

むさし野のみどりの末や天のはら

智蘊

の句もある。熊野法樂千句に、

熊野法樂千句

源氏國名百韻

富士の山たえずや風のめぐららん

行助

わくるは遠き武藏野の原

通賢

茂りてや猶たか萱の下みだれ

常安

などがある。源氏國名百韻〔源氏物語の巻の名と六十六ヶ〕には、

藤袴尾花もかるゝ冬のきて

寛正

ふじのかげふむ武藏野の霜

證

うへなきは若紫の色なれや

御

春夢草

などがある。「ふじのかげふむ」は奇抜な詞で面白い。牡丹花宵柏の春夢草には、住吉社壇での詠吟を収めてゐる。

武藏野

むさし野や萱が亂に妻乞の思をみせて小鹿鳴也

第一篇 武藏野

原薄

染出す初花薄むらさきのゆかりも秋や武藏野の原

此の二首は連歌では無く、普通の和歌である。後の一首は殊に縁の有る古語を引用したものである。宗長の壁草には、

壁草

むさし野は空や行くく末ならん

いつをか限わがたびの郷

むさし野やわくれば遠き末もみつ

わかれしかねの夕ぐれのこと

よこぐもにの幾夜ともなく朝立ちて

幾日かわくるむさし野のはら

などが見えてゐる。要するに連歌者流にも古歌の影響が著しく及んで

宴曲の善光
寺修行

ゐるのである。

翻つて韻文の他の方面を觀ようと思ふ。鎌倉時代の謠物に宴曲がある。其の善光寺修行〔宴曲抄〕と題するものは、鎌倉を發足して善光寺詣をする道行ミチユキを叙べたものであつて、當時の交通の状態を知るのに、大に參考となるものである。中に武藏野を通過する事が見えてゐる。

(前略)吹送フキオケル由井の濱風音たてゝ。頻ヒリによする浦浪を。なほ顧トキる常葉山ヘヤマ。かはらぬ松の緑の。千年も遠き行末。分ワケすぐる秋の叢。小萱荳露ながら。澤邊の道を朝立て。袖スベうちはらふ唐トウごろも。きつゝ馴ナにしといひし人の。干飯カライヒたうべし古も。かゝりし井手の澤邊かスギコシカガとよ。小山田の里に來にけらし。過來方スギコシカガを隔れば。霞の關といまぞしる。思きや我につれなき人をこひ。かくほど袖をぬらす

べしとは。久米河の逢瀬をたどる苦しさ。武藏野はかぎりもしらすはてもなし。千種の花の色々。移ひやすき露の下に。よわるか蟲の聲々。草の原より出る月の。尾花が末に入までに。ほのかにのこる晨明の。光も細き曉。尋ても見ばや堀難の。出難かりし瑞籬の。久き跡や是ならむ。あだながらむすぶ契の名残をも。深くやおもひ入間河。あのこの里にいざ又とまらば。誰にか早敷妙の。枕ならべんとおもへども。婦にそはずのもりてしも。落る涙のしからみは。げに大藏に槻川の。流も早く比企野が原。秋風はげし吹上の。梢もさびしくならぬ梨。打渡す早瀬に駒やなづむらん。たぎりて落る浪の荒河行過て。下にながるゝ見馴河。見なれぬ渡をたどるらし。朝市の里動むまで立さわぐ。是やは兒玉々鉾の。

道行人にことゝはん。者の武の弓影にさわぐ雉が岡。矢並に見ゆる鵜河。今宵はさても山名越ぞ。いざ倉賀野にとゞまらん（下略）

頻々としてあらはれる地名を見ると、武藏野の景狀が能く想ひやられるのである。それは武藏野横断の旅に實際の經驗を持った人の作であるからである。其の路次の地理を祭するに、鎌倉の常葉山下を過ぎ、井手澤を経て、小山田の里霞の關に到つてゐる。こゝに霞の關とあるのは、今の南多摩郡關戸に當る。處が今一般に市内麴町區の外務省の場所を霞が關と呼んでゐる。又江戸名所圖會を見ると、四谷大木戸の所を土俗霞が關或は旭の關とも云ひ、内藤新宿の大宗寺は霞關山と號するといふやうな事が書いてある。いづれも古意に適つてゐないやうである。關岡野洲良の説に、

霞の關

愚案、此關戸村は鎌倉治世の頃、軍防の爲に玉川の流を要害に取
て置かれたる刻セキならんとおぼし。職員令に關刻、義解に請依レ律。
關者檢判之處。刻者塹欄ミツカキ之所是。とありて、關は國界にある例、
刻は軍防の料也、ともに訓はせきなる故に通はして關の字を書來
れども、地理によりて考へわかつべき事也。

とあつて、此の關の意義を解釋してゐる。江戸名所圖會にも、小山田
關舊址の題を掲げて、其の關の事は記してゐるのであるが、それが霞
が關だとは言つてゐない。即ち

今關戸と稱するところ則これなり。多麻川の南岸にそひて古府中
より帝都及び鎌倉への街道なり。東奥北越の二道共に此地を往還
せざるはなし。小山田は莊の名にして、此地も昔は同じ庄内にてありしなり。今
は邑名にのみ残りて、此所より二里ばかり南の方に小山田村と稱

するこれ
あり。

とある。彼の夫木和歌抄には、小山田關を武藏と註して、左の二首を
載せてゐる。

あふことは苗代水にまかせてぞこさんこさは小山田の關

よみ人しらす

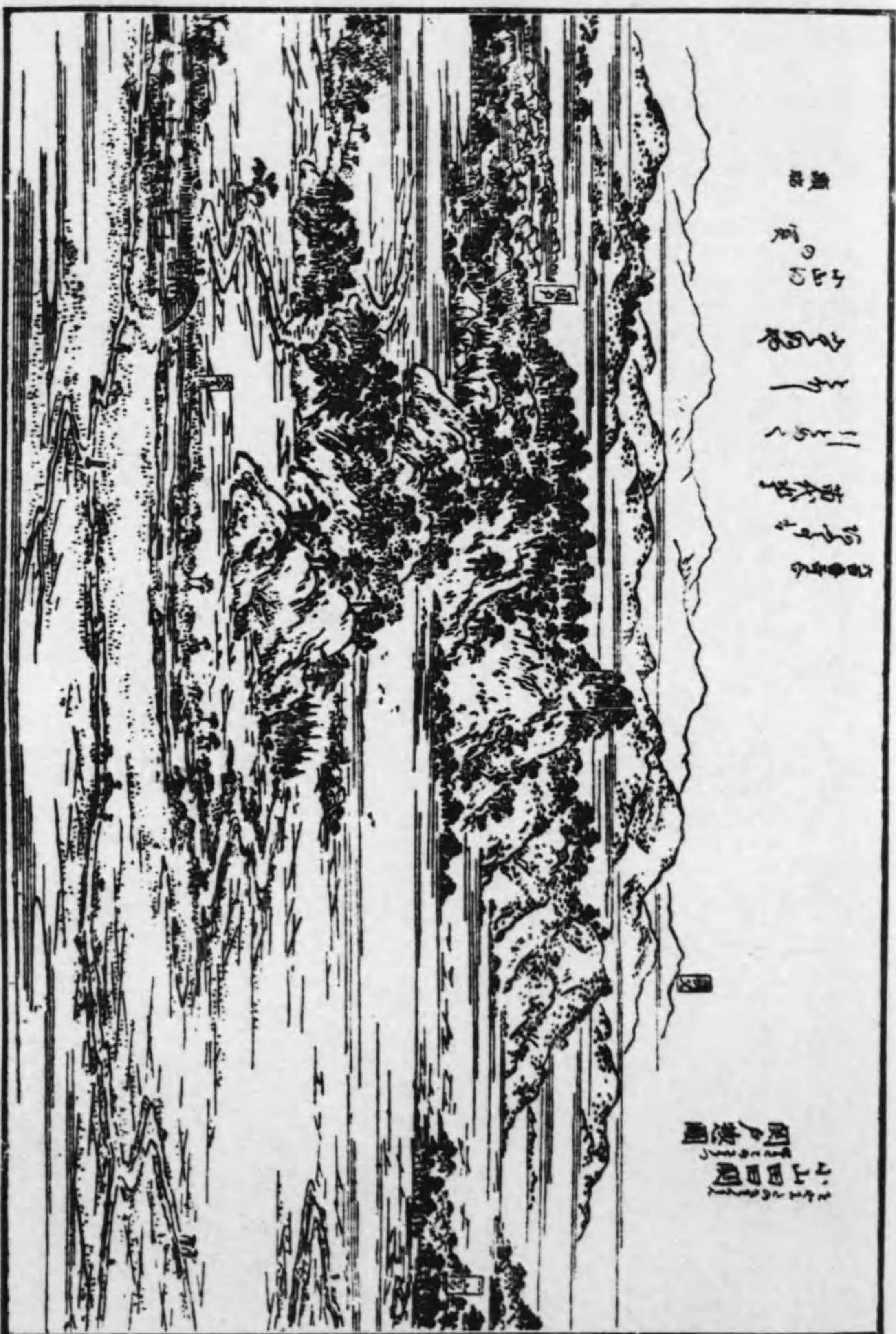
あふことは苗代水を引止めて通しはてぬや小山田の關

法橋顯昭

故吉田東佐氏の説に、

今按、霞關の始末及び其位置は、多く古書に所見なし。然れども
曾我物語、方角抄、回國雜記に參考すれば、關戸の地なりとする
を得ん。新拾遺集に、「いたづらに名をのみとめて東路の霞の關も

春ぞくれぬる」〔嘯歌上、讀人不_レ知の歌である。〕とあるを初見とすれど、古代の一關なるべし。(中略)而も小山田霞の關名の古史に見えざるは、重要な守固ならざりしに由るは勿論なるが、軍防令義解に「境界之上_{ホトリ}。臨時置_レ關。應_ニ守固_一者。並置_ニ配兵士_一。分番上下。」とあれば、王朝の比に臨時權置のものが、其名を地方にのみ傳へて、諸和歌集、宴曲抄等の興味に入りしなり。〔右の令義解の文は割註と本文とが交錯してゐる。〕とある。以上の諸説を綜合して、宴曲の詞句に參すると、霞關の位置及び通路は、共に明瞭である。「つれなき人をこひかくほど云々」とある語句には、巧に戀が窪を隱題としてゐる。戀が窪は國府_{コフ}が轉訛して、却つて雅名となつたと考へる。國分寺の所である。久米川も右と同じく北多摩郡内である。堀兼の井の事は、既に前に説明して置い



(殿所繪圖所名戸江) 關 田 山 小

た。路は入間郡に入る。入間川は名邑である。そはすの森は今明かでないけれども、先づは其の附近であらう。其の名が興が有るから歌詞に採られ、掛詞ともなつたのである。大藏は比企郡菅谷村の大字に遣り、槻川は都幾川とも書いて、其の北に當つてゐる。比企野が原、吹上を経て奈良梨に至る。此の地は今の八和田村の内である。荒河を渡り、兒玉郡での主な流である所の身馴川を越えて兒玉の里にはいる。雉岡は今の兒玉の内の八幡山町に在る。鏑河は上野國で、其の名は甘樂河の訛であるといふ。藤岡の西北の山名越をして、倉賀野に赴いたのである。

右の序を以て、武藏野に於ける通路を考へるに、府中の邊はさすがに要衝であつたのである。平治物語には、信西の子息遠流の事の條の

武藏野の通
路

道行に、「武藏野や堀兼の井をも尋ね」て下野に下る事を記し、又源平盛衰記には、頼朝が隅田川に陣し、川に浮橋を渡して打渡り、豊島の上瀧野河松橋〔長門本平家物語に〕に陣し、六所大明神に詣で、行きくつて足柄を越える事が見え。義經記には、義經が奥州から上る途に、板橋、國府コクフの六所の町を経て、平塚に出た事を載せてゐる。幸若舞の詞の馬揃未來記に、國府の六所ぶんばいの地名も出てゐる。六所は即ち府中の總社で、今、大國魂神社と稱する。御伽草子のカライト唐絲草紙にも、信濃から鎌倉に至る韻文的な道行がある。前に掲げた宴曲と對照の用に供しよう。

萬壽の姫は、あめのみやを立出で、通る所はどこくぞ。親子のちぎりはふかしの里こそめでたけれ。淺間の嶽にたつけぶり、身

唐絲草紙の
道行

にはあまれるおもひにや、いま入る山を打過ぎて、上野の國にかくれなき、ときはの宿をも打越えて、一の御宮をふしをがみ、二のたまはらに出でしかば、おやの名のみかち、ぶ山、するまつ山を打過ぎて、霞の關をもわけこして、入間の郡やせの里、いくらの里をか越しつらん。くもらぬかげはほしのやの、とがみの原をも打過ぎて、鎌倉山につき給ふ。

謠曲東北の
道行

此の霞の關と八瀬の里とは、序次が相前後してゐる。武藏野が歌枕として著名となつた結果、謠曲の文句にも之を用ゐたものがある。それは東北トウホクに於けるワキ僧の道行に、
春立つや、霞の關をけさ越えて、くくく、はてはありけりむさし野を、分けくらしつゝ跡遠き、山また山の雲を経て、都の空も

狂言針立雷

近づくや、旅までのどけかるらん。くくく。
とある。謠曲と文學上の關係のある狂言の詞（素より歌謠ではないけれども）にも次の如きものがあるから附記して置かう。針立雷ハリダツカミナリに於ける醫者の道行に、

やあ參る程に、これは廣い野へ出た。定めてこれは聞及キキオキうだ武藏野と云ふがこれであらう。扱もく廣い事かな。やあ今迄好い天氣であつたが、俄に暗うなつた。夕立がすると見えた。此の野で夕立に遇アうたら、何ともなるまい。云々

同入間川

荒御靈新田
神德

入間川イルマヅカには、大名と太郎冠者との途すがらの詞に、渺々たる武藏野を通る事を云つてゐる。近世の淨瑠璃にも、武藏野の事を語つたのがある。それは福内鬼外即ち平賀源内が門人等と合作した矢口後日荒御靈新田

神德の山口觀音の段に、

見渡せば古き名所様々に、有といふなる遁水の、遁隠れても世を渡る、民の手業の何故に、堀兼の井の水底を、今もたづねて久米川や、青梅も餘所に人見山、關戸もさゝぬ所澤、水は流れて入間川、岸村山の里つゞき、限も知らぬ武藏野は、今日はな焼きそ若草の、妻も籠れり我も籠れり、此寺の所縁ユカリもよしや義岑公、しづくと立出給へば、夫と見るより上生阿闍梨、ハット敬ひ奉る。
と云ふ文句である。

近世の歌人

近古までの和歌は既に掲げた。降つて近世の和歌や狂歌等の文學を一瞥しよう。特に江戸の歌人には、興趣の饒ユダカな歌を詠んだ者が多い。是皆實地に其の風光に親しんだ爲である。

戸田茂睡撰の鳥之迹に、

野月

山名玉山入道

武藏野の草の葉分に見えそめて露よりのぼる秋の夜の月

諸國行脚しける時武藏野より富士を觀て 梨本茂睡

むさし野をかこはぬ庭にしめおきて富士の高嶺を築山に見ん

奔放の風調の見るべきものがある。

戸田茂睡

賀茂真淵

真淵の賀茂翁家集に、

枯野

筑波嶺のみどりばかりをむさし野の草のはつかに残す冬かな

雪中眺望

雪はるゝ朝けにみればふじのねの麓なりけりむさし野の原

加藤枝直

加藤枝直のあづまうたに、

遠山霞

武藏野をふりさけみれば秩父嶺に春日かげろひ霞たなびく

八月十五夜月を見てよめる歌並に短歌

あもりつく、富士の高嶺に、たゞ向ふ、武藏の國は、大君の、遠のみかどと、大殿を、高知りまして、天の下、まをし給へば、少女ども、少女さびすと、手にまける、玉川の水、萬代に、たゆることなく、秩父嶺の、五百津いはむら、動きなき、國のほ見えて、野を廣み、此の月ごろぞ、ひきのぼる、たつのみ馬も、此の野らゆ、ひくといはずや、江を廣み、日並のみけに、そなふべき、狭はた廣はた、此の江らに、いさりもつきじ、春されば、小岫を、

りに、さく花を、見つゝぞしのぶ、秋されば、隈なき空に、てる
月を、めでゝぞ思ふ、昔より、きかずぞありし、谷具久タニクの、さわ
たる極み、しほなわの、とゞまる限、かくばかり、まつろひなび
く、御代のためしは。

反歌

かもめすむ江を廣みかも照る月の秋の夜渡る影ののどけき
眞萩咲く野を廣みかも秋の夜はくだちゆけども月はかくれず
此の長歌は、武藏野に關する傳來的趣味を悉く匯合せしめて、頗る興
の有るものである。

同千蔭

枝直の子なる千蔭のうけらが花に、

名所春曙

ほのくくと明けゆく空も紫に匂ふや春のむさし野のはら

八月十五日

障るべき山の端もなきむさし野は月みるための所なりけり

野月露深

武藏野や露わけ行かむ方もなし草は皆がら月になりつゝ
又清水濱臣編近葉菅根集に、次のやうな千蔭の長歌がある。

子日の遊をよめるうた

青丹よし、奈良の都の、大宮に、百の司を、めしつどへ、集へ給
ひて、豊明、きこしめしつゝ、初春の初子のけふの、玉はゝき、とる
手もゆらに、賜へりし、昔おもほし、玉敷の、たひらの宮の、外
面なる、北野の野べに、みゆきまし、小松が原に、大御輿、とゞ

め給ひて、君も臣も、酒みつぎして、遊ばし、古き例は、かけまくも、ゆゝしきかもよ、今の世に、けふとしいへば、打日さす、都の外の、天ざかる、鄙人すらに、白妙の、袖ふりはへて、畏きや、君が御代、八十つゝき、都筑が原に、八百萬、萬代かけて、君をほぎ、我身をいはひ、もののふの、八十氏人も、はく太刀の、組の緒しで、遊ぶなる、今日の子の日は、世々にたえせじ。むさし野のつゝきが原に打群れて小松ひくなるけふのたのしさ同書に、藤原美樹ウヅマキの長歌も見えてゐる。

藤原美樹

詠雪

秋すぎて、冬し來ぬれば、ふく風も、日にけに寒く、をちつ日も、きぞもくもれり、けふもかも、雪はふらなむ、遠白き、野にうち

いでて、ふる雪に、雪の遊せむと、ますらをの、友がきつらね、駒なべて、武藏野の原に、我は來にけり。

あま雲の晴るゝまに、武藏野はみながら雪になりにけるかな

田安宗武

田安宗武アモリゴトの天降言に、

薄

むさしのを人は廣しといふ我はたゞ尾花分過る道とし思ひき

これは格調に一特色が認められる。

松平定信

宗武の子なる松平定信の三草集に、

月をよめる

むさし野は露を光の海原や月も尾花の浪にたゞよふ

こなは譬喩が面白い。

武藏野の晝

不二は雪箱根は時雨行雲のはては夕日のむさし野の原
これは景情共に曠濶の概がある。定信の歌に就いて記した序に附加し
たいのは、山崎美成の閑室漫録に、江城中秋良夜詩歌として、定信の
歌を筆頭に數々あるが、中に左のやうなのがある。

むさし野やわきてくまなくすむ月の光にもらぬ露のことは

牧野備前守忠精

むさし野のかげぞくまなき富士のねの高きは今宵月の名にして

石野遠江守廣通

むさし野の尾花が末の白雲も月にさはらぬ今宵なりけり

勝田安藝守元忠

それから同書に、近衛内大臣殿御詠とて難題の歌が數首出してある中
に、むさし野のふねと云ふのがあるから、これも序乍らこゝに收めて
置かう。即ち

三日月のふねを追手の風ふけば尾花なみよるむさし野の原
といふのである。

本居宣長

本居翁父子の歌では、宣長の鈴屋集に、

野徑月

うかれてもはてはある夜の月影にわけもつくさぬ武藏野の原

霧中野

草枕おき別れてはゆきくれてむすぶもおなじむさし野の原

本居春庭

春庭の後鈴屋集に、

第一篇 武藏野

武藏野月

夕風にさわぐ尾花の波間より光ほにいつるむさし野の月

野草花

七草の外にもあまた咲く花の數限無きむさし野のはら

熊谷直好

熊谷直好の浦の汐貝に、

野月

むさし野の草にも月に入りにつり山の端をのみ恨みつるかな

此は想も面白く、調もよい所がある。宣長など江戸以外の人の、單に題詠に過ぎないのもあらう。

横山由清

降つて、後の人では、次の如きものがある。横山由清の月舎集に

野外霞

三條實美

武藏野の野末霞めるけさ見れば春の寒さもはてはありけり

三條實美の梨のかた枝に、

江戸のひらけて三百年になれる年の秋

武藏野の尾花を出でし月影も今は都とてりわたりけり

岩倉具視

岩倉具視の岩倉贈太政大臣集に、

野残雪

とりがなくあづまよりくる春ながらなほ武藏野は雪ぞ残れる

俳諧

轉じて俳諧の方面で逸し難いのは、雪中庵蓼太の武藏野三歌仙であ

らう。蓼太は天明三年の季秋、門弟を伴なつて武藏野を探り、堀難井、

武藏野、逃水を題として、歌仙（三十六韻）の催のあつたのが是である。

狂歌

又、狂歌の方面では、次の如きものがある。古今夷曲集に、

法橋由己

富士のねを自然枕にせん人の足をのばさば武藏野の原

行風

臺の物に山を駿河の富士ならば武藏野をこそ盃にせめ

狂言鶯蛙集に、

手枕歌種

野月

武藏野は元より廣きはらなればくもなくうみし桂をのこ子

此は品の悪くない作である。石田未得の吾吟我集には、

眺めやる末の草葉に雲とちて天地和合や武藏野の原

盃の名に流れたる武藏野に富士をたぐへば蓬萊の花

武藏野の盃

などがある。此の武藏野の盃の事は、曉晴翁の雲錦隨筆卷一に、

攝河近郷の方言に、集會の酒宴闌に成、既に盃を納んとなすに及んで、客より主に乞て、最早武藏にして納め給へといふ事を例とす。按ずるに、古代の作に武藏と號し大盃ありて、内一面芒ス、ヤマキの描金を書たり。正しく此武藏野を順盃にして納め給へと言しを、後世略して武藏といひ、又其風ナラひにて、今様の盃の大なるを出して、納ヨリの盃となすをも武藏と言へるなるべし云々。

と述べて、圖をも出してゐる。これで大盃である事が分り、其の意は、節用集大全に、「武藏野酒盃大者曰武藏也言野見不盡之意也。」とあるので、飲み盡さずの洒落に出てゐる事も知られる次第である。瀧亭鯉丈の和合人（天保比の作）の初編の冒頭にも、「大盃を武藏野と號ナツケしも、野見盡呑されぬといふ

謎にして、廣々と草深かりしも云々。」とあるのがやはり其の事である。又此の序に、同じやうな洒落が尙一つ思ひ合せられる。それは鳥亭馬撰の開卷百笑に在る吾友軒米人作の茶漬といふ文である。

武藏野御茶漬といふ見世を出して、殊の外うれる。友達が来て、コレきつい繁昌だけな、時に障子にむさしの御茶漬とかいたが、ちつとむりだと思ふ。アノ茶漬の始りは、淺草に海道茶漬といふが有た。夫から銀座町へ山吹茶漬がお茶漬の始り、宇治の茶に山吹といふが有からこきえたに、むさし野に茶があつてつまる物か。成程さういふは尤だが、おれも海道茶漬が有から、木曾海道茶漬としようとおもつたが、一度でこり／＼せうと思つて、むさし野とつけた。心ははら一ぱい喰せる思月さ。

蜀山人のめでた百首夷歌に、

野

名にしおふお藤元ゆるむさし野の原は皆がらめでたしとみん

武藏野

花すゝき邦畿千里のむさし野は招かずとても民のとゞまる

此の如き狂歌の多くは、古歌の興味を基として詠み出たもので、而も洒々落々たる太平の民の思想を反映したものと見なければならぬ。

三 紀行に現れた武藏野

和歌が動もすると、題詠の弊に流れ、所謂歌人は坐らにして名所を知り、直觀に憩へないで、或は想像を走せ、或は古人の思想を蹈襲するに比し、旅行記の文は、實際に其の地を踏んで、其の景を叙べたものであるから、寧ろ探るべき所が多く、随つて興趣も深いのを覺える次第である。

更科日記

菅原孝標の女の更科日記に、上總から京に上る途中の事を記して、今は武藏野の國になりぬ。ことにをかしき所も見えず。濱の砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、紫生ふときく野も、あし萩のみ高くおひて、馬にのりて弓もたる末見えぬまで高く生ひ茂り

て、中をわけ行くに、竹芝といふ寺あり。

とあるのは、紀行文に現れた最古の徵證であつて、紫草の事を云つたのは、古今集の歌を想ひ起しての事であらう。さうして蘆荻の高く生えたさまも能く寫し出されてゐる。

都の菴

降つて宗久（俗姓平吉、初、大炊助と曰ふ、或は大友兵部少輔賴資と曰ふ。）の都の菴と云ふ觀應の比の紀行には、甲斐から常陸へ行く折、武藏野で盜難にかつたことを記してゐる。さうして伊勢物語の故事を引用してゐるのを見る。

武藏野のはてなき道に行きくれて、その夜は道づれの僧などあまたありしも、皆假初の草の枕をむすびてとゞまり侍りし程に、此の野は昔も盜人ありてこそ、けふはな焼きそとも詠まれけると聞

きしかど、さまでやはと思ひしに、苔の衣をさへひきてかへりし
白波の荒かりし名残に、いと旅の床も物うくこそ侍りしか。

いとはずばかゝらましやは露の身の憂にも消えぬ武藏野の原

北國紀行

堯惠法印(堯孝法印の門下)の文明十七、八、九年の北國紀行には、
興味の有る記事があるから、次々に説明を加へて摘録しよう。

十二月〔文明十
八年〕のなかばに、武藏野へ移りぬ、曙をこめて、ちやう
のはなといふ所をおき出、行衛もしらぬ枯野を駒にまかせて過侍
るに、幾千里ともなく霜に曇りて、空は朝日の雲もなく、さしあ
がりたる風景肝にめいじ侍しかば、

朝日かげ空はくもらで冬ぐさの霜にかすめるむさし野の原

右は上野の佐野舟橋の記事の續である。ちやうのはなは大里郡幡羅村

であつて、昔は廳鼻の祖郷と云つたさうである。

其夜は箕田といふ所に明して、武藏野を分侍るに、野徑のほとり、
名に聞えし狭山有。朝の霜をふみ分て行に、纒なる山のすそに、
かたち計なる池あり、

氷ぬし汀の枯野ふみ分て行ばさ山の池のあさかせ

箕田は北足立郡で、吹上と鴻巣との間に位する。狭山は大里郡三ヶ尻
村の野中に立つてゐる。池は少間池とも書いて、山の近くにある。多
摩郡のではない。

其日の半より、漸々富士はみえ侍りぬべきを、よるの霜なごりか
きくもりて、かぎりもしらす侍り。からうじて鳩が井のさと滋野
憲永がやどりにつきぬ。二十日のよの残月はがらかに、かれたる

草の末に落かゝりて、朝の日又東の空より光計ほのめきたり。富士蒼天にひとしくして雪縁をかくせり。唯それならむと思ふに、忙然として大空にむかへり。

けさみればはやなぐさみつふじのねにならぬ思ひもなき旅の空鳩が井は北足立郡鳩谷トガヤである。日光街道に當つてゐる。

五日〔文明十九年正月〕立春

春はけふたつともいはじむさしのや霞む山なきみよし野の里

三芳野は、彼の伊勢物語に入間の郡、とあるものである。

同月の末、武藏野の東の界、忍岡に優遊し侍。鎮座社五條天神と申侍り。をりふし枯たる茅原を焼侍り。

契り置て誰かは春のはつ草に忍びの岡の露の下もえ

並びに湯島といふ所有。古松遙にめぐりて、しめの内に武藏野の遠望かけたるに、寒村の道すがら野梅盛に薫す。これは北野御神と聞えしかば、

忘れずば東風吹きむすべ都まで遠くしめののそでの梅が香

五條天神及び湯島天神の事の見えてゐるのは、頗る注目し値する。

同廿八日〔文明十九年六月のこと〕武藏野のうち中野といふ所に、平重俊といへるが、催しによりて、渺々たる朝露をわけ入て瞻望するに、何の草ばの末にも唯白雲のみかゝれるをかぎりと思ひて、又中やどりの里へ歸り侍りて、

露はらふ道は袖よりむらさきえて草ばにかへるむさし野のはら漸く日高くさし昇りて、よられたる野草の原を凌ぎくる程、暑さ

しのび難く侍りしに、草の上にたゞ泡雪のふれるかとおぼゆる程に、ふじの雪うかびて侍り。

夏しれる空やふじのね草のうへの白雪あつき武藏野の原

ほりかねの井ちかき所にて、

そことなく野はあせにけり紫もほりかねのゐの草ばならねど

同じ比の道興准后（藤原兼嗣の裔で、大僧正、准三后、聖護院、新熊野檢校。）の廻國雜記（文明十八年）には、武藏に關する記事が甚だ多い。依つて此も説明を加へて、こゝに摘採しよう。

〇 廻國雜記

武藏野にて殘月を眺めて、

山遠し有明のこる廣野かな

おなじ野をわけくれてよめる、

草の原わけもつくさぬむさし野のけふの限はゆふべなりけり

この夜はこの野に假寝して、色々の草花を枕にかたしきて、少しまどろみ夢の覺めければ、

花散て草の枕の露のまに夢路うつろふ武藏野の原

武藏野の草にかりねの秋の夜は結ぶ夢路もはてやなからん

岡部の原といへる所は、かの六彌太といひし武夫の舊跡なり。近代關東の合戦に、數萬の軍兵討死の在所にて、人馬の骨をもて塚につきて、今に古墳の數多侍りし、暫く回向してくちにまかせける。

なきをとふをかべの原の古塚に秋のしるしの松風ぞふく

むら君といへる所を過るとて、

たが世にかうかれそめけん朽果てぬ其名もつらきむらきみの里
岡部は大里郡で、村君は北埼玉郡である。

半澤といへる所にやどりて、發句

水なかば澤べをわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て、是彼歌よみ、連歌など言捨けるに、

吾妻路の霞の關に年越えば我も都に立ちぞかへらむ

都にと急ぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待つらむ

此關をこえ過て、戀が窪といへる所にて、

朽果てぬ名のみ残れる戀が窪今はたとふも契ならずや

半澤は南多摩郡ツッ圖師の小名である。霞の關が關戸の地であることは前に考證した。

むねをかといへる所を通り侍りけるに、夕の烟を見て、

夕けぶりあらそふ暮を見せてけりわが家々のむね岡の宿

堀兼の井見にまかりてよめる、今は高井戸といふ。〔編者云、今は云々
る、別人の筆かも知れぬ。こゝは前後入間郡の事を云つてゐるのである。高井戸は今の豊多摩郡である。〕

俯ぞかたるに残るむさしのやほりかねの井に水はなけれど

昔たれ心づくしの名をとめて水なき野べをほりかねの井ぞ

やせの里はやがて此續きにて侍り。

里人のやせといふ名や堀かねの井に水なきをわびて住らん

宗岡や八瀬などは入間郡である。

これより入間川にまかりてよめる、

立よりてかげをうつさば入間川わが年波もさかさまにゆけ

此の次に、佐西ササイの観音寺の事、黒須川の鶉飼の事、大塚の十玉が坊での詠吟の事等が見えてゐる。此の大塚も入間郡で、今の南畑村ナニバタである。河越といへる所に到り、最勝院といふ山伏の所に一兩夜やどりて、

限あればけふ分盡す武藏野の境もしるき河越の里

これは河越を以て武藏野の境と認めてゐた様子が想はれる。

うとふ坂といへる所にてよめる、

うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もがな

すぐろといへる所に到りて、名に聞き薄など尋てよめる、

旅ならぬ袖もやつれてむさし野やすぐろのすゝき霜に朽ちにき

善知鳥坂ウチトリカは河越の附近仙波村センハの内である。勝呂カチロも今村名が存してゐる。

此あたりに野火留の塚といふ塚あり。けふはな焼きそと詠せしに

よりて、烽火忽にやけとまりけるとなむ、それより此塚をのび留と名づけ侍るよし、國の人申侍ければ、

わか草のつまもこもらぬ冬されにやがてもかるゝのびとめの塚

野火止は今の大和田である。

これを過て、ひざをりといへる里に市侍り、暫くかりやに休て例の俳諧を詠じて、同行に語り侍る。

商人はいかで立らん膝折の市に脚氣をうるにぞ有ける

脚氣と云つたのは、膝折といふ語から興じたのであつて、腕を盛る籠即ち脚籠をカツケと云つて、此の地で賣り販ぐのを詠んだのである。新編武藏風土記稿に其の圖を出してゐる。

ところ澤といへる所へ遊覽に罷りけるに、福泉といふ山伏、観音

寺にて竹筒出しけるに、薯蕷トコロといへる物肴にありけるを見て、俳諧

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老澤かな
此所を過ぎて、くめく川と云ふ所侍り。里の家には井なども侍らで、唯此河を汲みて、朝夕用ひ侍るとなん申しければ、

里人のくめく川とゆふぐれになりなば水はこほりもぞする
(イこそせめ)

武藏野に出て酒など飲んで遊びけるに、始て雲雀の揚るをみて、
水草の一もとならぬむさし野におつるひばりも床まよふらん
武藏野の末に濱崎といへる里侍り。かしこにまかりて、
武藏野を分けつゆけば濱崎の里とはきけど立波もなし

膝折や濱崎は北足立郡である。以上に據つて、作者の足跡の遍き事を見るであらう。尙、淺草、小石川、芝の浦なども見えてゐるが、今一々こゝに掲げない。因みに、此の廻國雜記には、關岡野洲良ヤヌラの標註〔政文八年の自序がある、刊本二冊〕があつて、地理や品物を解説してゐる。宜しく参照せられたい。

次に宗長（連歌の名家、駿河島田の人）の東路の津登と云ふ永正六年の紀行には、こんな事が書いてある。

八月十一日、武藏の國勝沼といふ處にいたりぬ。三田彈正忠氏宗此處の預主たり。かねてしも白川の道々の事申通はし侍しかば、こゝのやすらひ十五日に及べり。連歌度々有。きりはたゞ（イけさ）わけ入八重の外山かな

此山家、後は甲斐の國の山、北は秩父といふ山につゞきて、誠の深山とはこゝを申すべからむ。此山深き心なるべし。

同じ處に山寺あり。前は武藏野なり。杉本坊といふにして、露をふく野風が花に朝ぐもり

武藏野の景氣ばかり也。

同十五日、氏宗、同じく息政定、これかれ駒打並べ、武藏野の荻薄の中を過行がてに、長尾孫太郎顯方の館はちがたといふ處に着きぬ。政定馬上ながら口遊クチスガびに、

むさし野の露の限は分もみつ。秋の風をばしら川の關

此の比、越後國銚楯により、武藏、上野の侍進發の事有て、いづこも靜ならざりしかば、ひと夜有て、翌日日たけて、長井の誰や

らんの宿所へと送らる。夜に入て落着ぬ。

右に山寺とあるのは、今の西多摩郡霞村なる鹽船觀音堂の事であつて、杉本坊といふのは、其の別當で、其の家は今も存してゐる。鉢形は荒川を隔て、寄居ヨリキの南に在る。右の文意によると、いかにも兵馬倥偬の狀が想ひやられる。又、

鉢形のたちにして、

霜をへん生さきしるし松の千代

馬庭豊前守重直興行せし也。顯方いまだ少年行末遙なる事を賀し侍る計也。又一座興行發句、顯方にかはりて、

さえし夜をかさねてけさや薄氷

連歌果て、酒など有て夜更侍りし也。當城逗留の旅宿隨意軒とい

ふにして、

神無月くれざりし秋か宿の菊

庭の菊秋を殘せるさま成べし。鉢形を立て須賀谷といふ所に、小泉掃部助の宿所に一日休らふ。人數はなくて懷紙表八句、

冬枯や萱が下葉の秋の風

武藏野の東野中の程なるべし。霜枯の景氣ばかり也。あたりの平澤寺にして、

こほりけり松にうごかぬ岩根水

本尊は不動尊、池にふりたる松有。又勝沼につきぬ。

菅谷村は比企郡であつて、平澤寺は其の村に在る。

谷宗牧の東國紀行に、江戸城の富士見の亭や、菟玖波山の亭での武

東國紀行

武藏野の紀行

藏野眺望を記した一節がある。隅田川や淺草觀音の森の見える事も書いてある。此は天文十四年三月の事である。其の文章は略して置く。

北條氏康（長氏の孫で、氏綱の子である。）の武藏野紀行といふ文がある。「天文十五年仲秋の比、武藏野をみんとて、此年月思ひ立ちぬる事なれば、人々あまた打連て、小鷹狩して遊ばむとて、皆々狩の裝束して、馬に打乗り、まづ鎌倉に詣でける。」と書き起して、武藏野を狩り、隅田川を渡り、小田原に引返した由を記してゐる。

比は八月上旬、朝霧深く分入て行に山あり、いは山といふ。此山の後は甲斐の山、北はちぶなど申侍る。それより武藏國勝沼と云所に着ぬ。齋藤加賀守安元此所の領主たり。常々道々の事申通はしければ、山海の珍物數を盡し響應しける。此所に二月逗留して、

それより武藏野を狩りゆくに、誠に行けどもはてのあらばこそ、萩、芒、女郎花の露にやどれる蟲の聲々、あはれを催すばかりなり。むさし野といづくをさして分入らむ行くも歸るもはてしなれば

古の草のゆかりもなつかしければなり。これも紫の一もと故なるべし。

へだつなよ我世のなかの人なればしるもしらぬも草の一もと
明くれば八月十三日朝霧彌々深くして、道もさだかにみえわかす。
馬にまかせて行、長井の庄にも着ぬ。誠や若紫の卷に、かゝる朝霧をわけ入らんとあるもこれなるべし。

前に引いた宗長も、又此の氏康も、共に勝沼の事を言つてゐる。其の

故田中義成
氏の説

地は今の青梅町の内である。抑、氏康が文雅風流の士である事は、北條五代記などに稱揚してある如くで、又野史にも、氏康に此の紀行の存する事を云つてゐるのであるけれども、雜誌歴史地理第一卷第四號の故田中義成氏の考證に據ると、此の紀行は前の東路の津登に據つて後人が書いた偽作であると認めなければならぬやうである。其の論據として、路順の記述が全く地理を失してゐる點、又三田氏は世々勝沼に居り、永祿六年綱秀の死まで渝らない事は、天寧寺の大永元年の鐘銘や金剛寺の三田氏の位碑の裏書などの證があるから、齋藤加賀守安元を此の時の領主とするのは、歴史上認めることの出来ない點等六條を擧げてある。之を思ふと、此の紀行の文は記叙餘に略に過ぎ、詞藻も亦熟してゐるとは云ひ難い。怖らくは氏康の詠歌を本として、別人

が補綴したものであらう。

日光山紀行

藤原(烏丸)光廣の日光山紀行と題する東照權現御遷座の記に、

二十三日〔元和三年三月の月のこと〕は山の端しらぬむさし野にわけいらせ給。草より出るは月のみかは。あかねさす日も同じ。萱生よりかげのどかに、霞にもるゝ春のながめえもいはず。(中略)堀かねの井は右にみてとほる。決定知近水、心にうかぶべし。

とある。原上の太陽に就いて記したのは、亦注目しなければならぬ。蓋し實景から得た感に違無からう。

俳人の文

鴉衣の武藏野紀行

俳人で旅行家である。大淀三千風の日本行脚文集は、其の遍歴する所、海内の名區に互り、文章も亦暢達である。武藏野を往返したことが數次に及んだ由が見えてゐる。降つて横井也有的鴉衣に、武藏野紀

行がある。是も亦古歌の趣味を基本として書いた物である。

庚申〔元年〕のことし、霜月のはじめなりけり。江戸を出で、清戸といふ處に、旅より旅の假寝も十日餘り、母やある、子やもてる、あるじに咄もやをら馴染みそめて、此のあたりの事など尋ね聞くに、昔はこゝもとも月の名に負ふ武藏野なりしよし、今は家連なり、田畑と變じて、露おく草にもあらぬ大根牛蒡の殊にめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々には、其廣き野の迹残れりと聞きて見にまかりける。案内する男の豊なるも、時鳥きくしるべならねばと、其の日の興にして、龜が谷、下留などいへる村々を過ぎて、かの野には

出ぬ。誠に四方の木竹もなく、草さへも今は霜枯れはて、あはれに物すごき原のさま也。

武藏野やいづこを草のかげひなた

そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな

くれゆく空も思ひやりて、

武藏野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋ね侍り、こゝは伊勢物語に今日はな焼きそと詠みし跡なれば、里の名もかく呼び侍るとか。業平塚とて、さびしきしるし今も残れり。歌の心を知らば、枯草に吸殻な捨てそと戯れて、

こもるかと問へば枯野のきりくす

以上列載した諸家の文を通観するに、畢竟古歌の興味を以て、歌枕名所を尋ねるのを主としてゐる。さうして概ね剴切な観察と、精密な叙景とに乏しい點は、遺憾としなければならぬ。けれども自然を愛し、風雅を好み、能く塵寰を脱して吟行を事とした古人の述作が、此の如く傳存する事は、決して閑却してはならないと思ふ。

四 餘言

古は單に草莽の曠野として認められ、和歌の題目としては、或は野草を詠じ、或は秋月を興じたのである。後漸く風流の士の往返する所となつては、歌謠上の名所は、紀行の材ともなつたのである。元來東

國の邊陲として、京洛の搢紳には、好奇の情を以て遇せられてゐたのであるが、時勢の推移は、遂に此の野の末の開けて、江戸となり、東京となるに至らしめた。吾人は古來の文學に對して、頗る今昔の感を深うするものがあると共に、ひたすら昭代の惠澤を慥ばなければならぬのである。

第二篇 隅田川

一 隅田川の水系及び名稱

武藏國の勝概を説くものは、何人も隅田川を思ひ浮べないといふはなからう。北野菊塙の墨水遊覽誌に、

水系

そもくすみだ川は、武藏國秩父郡中津川を水源として、それより、秩父の諸水相會し、榛澤、男衾、大里、足立、横見、入間、新座、葛飾、豊島の諸郡を過ぎて、凡三十四五里の長流なり。水上を荒川といふは、秩父大瀧より出るゆるゑなり。すみだ川といふは、荒川より淺草川までをいふ。淺草川のすゑは、兩國川より品川の海へながれ入る也。

とある。幸田露伴氏の蝸牛庵夜譚に、東京の水系を詳述した中にも、隅田川とは隅田^{スダ}を流るゝを以て呼ぶことなれば、隅田村以上千住宿あたりを流るゝをば千住川と呼び、それより以上をば荒川と呼ぶ習ひなり。水源は秋の日など隅田堤より遠く西の方に青み渡りて見ゆる秩父郡の山々の間に、大瀧村といへるが、北の川の最上流に位する人里なれば、それより奥は詳しく知れねど、おもふに甲斐境の高山幽谷より出で来るなるべし。

川名

とある。川名の由來は、既に冕嶠陳人の武藏名所考（文政七年刊）にも、

按するに、隅田川は葛飾郡に隅田村といふ地ありて、そこに渡口あるゆゑに隅田川と稱したるを、通じて此川の名とは呼びけん、猶

戸田村の渡のほとりにては、戸田川といひ、淺草のほとりにては淺草川といふが如し。又宮戸川といへるも、今の三谷といふ所、昔もみやとと唱へけん、それがゆゑに此名ありしにや。又水上を荒川といふは、大瀧より出づるゆゑ也。

と云つてゐる所である。此の隅田^{スダ}の語源は、確に考へ難いけれども、後に私見の一端を述べよう。

水系の變遷

抑、隅田川の水系は、古來變遷を経たものである。故吉田東伍氏の刀禰川澤志の説が頗る要を得てゐる。

隅田の水名は、三代格、承和二年官符に、武藏下總兩國界、住田^{スミダ}河、崖岸廣遠、不得造橋、四艘、元二艘、今加三二艘云々とあるを初見とす。今は此水、秩父入間の合流より成りて、専ら千住

驛より下に隅田川と云へど、昔は太田庄、下河邊庄の利根を承けて、猶遠く隅田川とも呼ばれしなり。且千住、戸田の方より來會するものを、入間川と云ひ、秩父荒河の河道も古今の大變を経たり。〔類聚三代格の原文は、書式が右の引用文とは異なつてゐる。〕

とある。即ち義經記に、利根川、末に下つてすみだ川と名づくこと記し、又關八州古戦録にも、「淺草川ハ豊島郡ノ千束ノ庄ノ内ニテ、水上ハ利根川、入間川、荒川ノ三流ニ續ケリ。」と云つてゐるのは、故の無い事ではない。

他國のすみだ川

序乍ら附記して置かうと思ふのは、元來すみだと稱する川は、他國にも存することである。紀伊國に存するといふものは、次の萬葉集卷三の辨基の歌で名高いのである。

亦打山暮越行而廬前之角田河原爾獨可毛將宿

此の待乳山、庵崎、角田河に就いて、紀伊續風土記の伊都隅田莊の條下に、

待乳山今大和に屬す。

紀伊の界古今の別ありて、所謂信土山は古は兩國の界なり、故に古人其地を紀州とも和州ともいふ、今其大和宇智郡に屬するより、後人古今堺の別なる事を知らず、古人の詠歌と合はざるより區々の説あり、皆誤なり。 待乳川は今の堺川なり

角田川は堺川合流の所より、相賀莊妻村領烏帽子岩までの間隅田

莊中紀川の流をいひて、別に川あるにあらず。或は今の堺川の事とすれども、堺川は萬葉集に見

えたる待乳の山川にて、隅田川原などいふべき川原にあらず、疑ふらくは誤なり。 (以上摘録)

と云ひ、庵崎は芋生村(イモフがイホに轉じたのであらう。)の出崎の義であらうと説いてゐる。此の萬葉集所見の地名からして、同名の川の縁で、武藏の方にも、待乳山や廬崎などの名所を生ずるに至つたや

うである。關八州古戦録に、

牛島ト云ヘル地ヲ廬崎ト呼來レリ。金龍山ト唱フル岡ヲマツチ山ト云習ハシ侍ルモ、イツノ頃ヨリ好事ノ者ノ僭稱シタル業トモシラズ。

と云つてゐる、(金龍山の謂はれに就いては、江戸雀や増補江戸咄に二の俗説を傳へてゐる。)併し此は既に建保三年の内裏名所百首〔後に〕にも見えてゐるのであるから、極めて古い事である。

尙、夫木和歌抄を見ると、すみだ川は駿河、大和、伊勢、出羽にもあると註してある。

二 文學に現れた隅田川

伊勢物語

以下略時代の順序を逐うて、隅田川の國文學にあらはれた跡を追つて見よう。其の初は伊勢物語や古今集などからである。伊勢物語に、
なほゆきくゝて、武藏の國としもつふさの國とふたつが中に、いと大きな河あり。その河の名をば隅田川となんいひける。その河のほとりにむれ居て、思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなとわびをれば、わたしもりはや船に乗れ、日もくれぬといふに、
乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりに、白き鳥のはしと足と赤きが、鳴の大ききなる、水のうへに遊びつゝいををくふ。京には見えぬ鳥なれば、

皆人見しらず、渡守に問へば、これなむ都鳥と申すといふを聞き
て、

名にしおはゞいざこととはむ都鳥我がおもふ人はありやなしや
と

とよめりければ、船人〔流布本には、人の字が無い〕こぞりてなきにけり云々。〔詳書類從本に據る、其の他の本は字句に異同がある。〕

古今集

とあるのは、文學上最古のものである。之を古今和歌集には、卷九羈
旅歌に、在原業平朝臣として、次のやうに出てゐる。

武藏國と下總のくにとの中にある隅田川のほとりに到りて都のい
とこひしうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて、思ひや
れば、限なく遠くもきにけるかなと思ひわびてながめをるに、渡

守、はや舟にのれ、日も暮れぬといひければ、舟にのりて渡らむ
とするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる
折に白き鳥のはしと足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見
えぬ鳥なりければ、皆人見しらず、渡守に、これは何鳥ぞと問ひ
ければ、これなむ都鳥といひけるを聞きてよめる。

今昔物語

との詞書を以て、右のと同じ歌がある。尙此の故事を源隆國の今昔物
語にも載せてゐる。重複の嫌はあるが、文章比較の参考に資さうと思
ふ。其の卷廿四、在原業平中將行_ニ東方_ニ讀_ニ和歌_ニ語第三十五に曰く、
（前略）尙行々テ武藏ト下總トノ中ニ大ナル河有リ。其ヲ角田河ト
云。其河邊ニ打群居テ思遣レバ。无_ニ限り_ニ遠ク來ニケルカナト侘
思ヘルニ。渡守早ク船ニ乗レ日暮レヌト云ヘバ。乗テ渡ラムト爲

ル程ニ。皆人京ニ思フ人无キニシモ非デ侘思ケリ。而ル間水ノ上ニ鳴ノ大キサ有ル白キ鳥ノ背ト足トハ赤キ。遊ツ、魚ヲ食フ。京ニハ更ニ不見エ、鳥ナレバ人モ不見知。渡守ニ彼レハ何鳥トカ云フト問ヘバ。渡守彼レヲバ都鳥ト云ケレバ。業平此ヲ聞テ此ナム讀ケル。

(こゝに前のごとく同様の歌がある。)

船ノ人皆此レヲ聞テ舉テナム泣ケル。(下略)

此の様に最古の物語と勅撰集とに現れたから、文學上の典據として、後世の歌文に影響したことは甚大である。扱右に見えてゐる所で、隅田川が武總兩國の界である事は、明かである。服部南郭の「兩岸秋風下三州」と賦したのも、これがためである。兩國橋の名の存する由

葛飾郡

來も、こゝにあるのである。抑、葛飾郡は延喜式には武藏に載せないで、下總十一郡中の一である。和歌類聚抄や色葉字類抄や拾芥抄も亦皆同様である。大橋方長の武藏演露に、北條分限帳、武州古圖に出す所にも、葛飾郡は無いと云つてゐる。古昔葛飾の地が、今のやうに武藏に分屬したのでない事は、無論である。併し現今は江戸川を以て國界としてゐる。それで此の變遷は、果していつ頃からであらうか。高田與清の松屋棟梁集の説を摘記しよう。

高田與清の説

八雲御抄、夫木抄、松葉名所集、歌林名所考、袖珍歌枕、秋の寢覺などに下總と注せしは、葛飾郡にすみだの里ありて、そこにおける河の名なればなるべし。吾妻鏡に、むさしのくにの人葛西の六郎平家物語長門本におなじ國人かさいの三郎などいふがあり、

こはその住所の名を族稱にせしなれば、葛西のこほりを武藏に管スベたりしあかしとすべし。建保名所百首、歌枕名寄、新撰歌枕名寄、机右抄、歌枕玉叢抄抜書、角田川謠詞などにも、すみだ川を武藏の名所とせれば、建保の頃より後、こほりも川もむざしの國には隸ツキたる也。勅撰名所和歌抄出、名所方角抄、梅若權現の縁起には、二國に涉れりとす。さてふたゝびもとの下總にかへされけんことは、北國紀行、あづまぢの裏ツト、河越記などにいづ。後に今のごとく武藏の郡に定められしは、貞享元祿の間ならんこと、江戸總鹿子大全、瀬田問答、龜戸の善應寺の鐘のことがき、中田氏が家にもたる水帳のうはぶみなどかうがへてしるべし。さればすみだ川ははじめは下總、中ごろは武藏、その後又下總、今はむざしの名

どころ也。

右の中頃は武藏との断定には、疑ふべき餘地がある。瀬田問答（太田覃蜀山人）の間に、瀬田貞雄の答ふの所説は、左の通であ。

兩國ヨリ東ノ方、本ハ下總國葛飾郡ナリシヲ、元祿ノ頃豊島郡ニ被レ改テ、武藏ニ屬セシト云、元祿ハ何年ニ候哉。

答曰。何レノ書留ニモ元祿ノ初ト計記シテ、儘ニ年月ヲ記サズ候。此事其所ノ百姓杯へ御觸有テ、本所ヲ武藏ト書出候事、御郡代伊奈氏ノ舊記杯ニハ儘ニ可レ有レ之ト、數年心掛候ヘドモ、手寄無ニ御座ニ打過申候。但御書面ニハ豊島郡ニ被レ改候ヨシ御認候へ共相違ニ候。中川ヲ堺トシテ（巴王曰。中川ニアラズ利根川ナリ、庄内ニ合半東西葛西領モ、此時ヨリ新武藏トナル。）西ノ方（則本所深

川也)ヲ武藏ノ葛飾郡ト唱へ、東ノ方ヲ下總ノ葛飾郡ト申セトノ事ニテ、武藏下總トモニ當時葛飾郡アルハ此故ナリ。

覃後按。本所中ノ郷、林諸鳥(鹽瀨和介)別莊ノ庭ニ建ツル碑有。

其文ニ曰。

萬葉集十四下總國歌云。

爾保^{ニホドリ}杼^{リノ}里能^ノ可^カ豆^{ツシ}思^シ加^カ和^ワ世^セ乎^ニ爾^ニ倍^ヘ須^ス登^ト毛^モ曾^ソ能^ノ可^カ奈^ナ之^シ伎^キ乎^ニ刀^タ爾^ニ多^タ氏^ヂ
米也^{メヤモ}母^モ

葛飾郡本下總國也。貞享三年丙寅春閏三月。割^ニ利根川西。屬^ニ武

藏國ニ云。

天明二年壬寅冬十月。林居士諸鳥。得^ニ陸奥國牡鹿郡石。建^レ之

重棟曰。葛飾郡隅田村木母寺ノ鐘ノ銘ニ、豐島郡トアリ、一タビ

豐島共唱ヘシカ、又豐島ノ郡界故誤リシニヤ、此鐘ノ銘ハ近衛信

基公ノ文ナリ。

溫知叢書本ノ頭註には、「利根川以西ノ全ク武藏ニ屬シ葛飾ト定リシハ、天和ノ朱印ニ始ル。其以前ハ、武藏下總豐島葛飾錯雜シテ定リナシ。」ともある。

都鳥

儲又上に引いた古文に顯著な一事實は都鳥である。それは蓋し鷗の類であらう。十六夜日記殘月抄卷一に、

(前略)古歌に、海にも河にも濱にもよみ、又色は白くて背と足とは赤きよしいへるものおほかり。與清按に 都鳥の説あまたあれど、契沖阿闍梨、季吟法師、眞淵翁などの、伊物の註に鷗^{カセメ}といはれしが千古不易の確論なるべし。そは鷗にも種類おほくて、形も

や、別あり。小野蘭山翁が本草啓蒙四十三に、鷗を筑前にてネコドリ、筑後にてネコサギ、上總にてウミネコ、武藏本牧にてハマネコとよぶよしいへり。これ鳴聲の猫に似たるがゆゑ也。(中略)さて都鳥のミヤは聲によりておほせ、コドリはよぶこどり、みさこどりなどの小鳥に同じく、大鳥に對へし稱也。貝原篤信が大和本草十五に、西土ニテ都鳥ト稱スル鳥アリ、背ハ黒ク、腹脇白ク、背ト足ト赤シ、背長シ、ケリノ形ニ似テ、其形ウルハシ、伊勢物語ニイヘル都鳥ハ是ナルカ、ともいひたれど、武總下總などの間にさる鳥いとまれ也。伊勢物語の都鳥は決して鷗なる事うつなし。古今著聞集二十に、成季と云者が都鳥を飼て、萬の蟲をくはせし事もみゆ。

と考證してゐる。都鳥の初めて見えるのは、萬葉集卷廿の左の歌である。

布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都々奈久波美夜故杼里
香蒙

堀江は今の大阪にある。宇津保物語吹上の上に、「渚より都鳥つらねてたつをりに濱千鳥の聲々なくをきゝて」とあるのは紀州である。後拾遺集には和泉式部が和泉へ下つたをりに、夜都鳥のなくのを聽いて詠んだ歌も見えてゐる。其の他夫木和歌抄を見ると、越の海のを詠んだ源順の歌や、播磨の飾磨に於ける相模の歌や、和田のみさきでの源俊賴の歌なども見えてゐる。阿佛尼十六夜日記にも亦載せてゐる。けれども隅田川といふと、都鳥を聯想するのは、全く伊勢物語に基づくの

である。

更科日記

更科日記には次の記事がある。

野山葦荻の中を分くるより外の事なくて、武藏と相模との中にありて、あすだ川といふ。在五中將のいざ言問はむとよみけるわたりなり。中將の集にはすみだ川とあり。〔編者云、關根正直氏の説に、在五中將云々から此迄は、後人の加筆であらうと〕船にて渡りぬれば、相模の國になりぬ

中神守節の説

此の文意は殊に訝しい。これに就いては、古人で既に説を立てゝあるものがある。中神守節の隅田川考には、荻生徂徠と山岡明阿との之に對する考説を紹介した後、自家の按を下して、此う言つてゐる、いかさまそのところあないせしものの、多磨川をさして是なん隅田川なりとみだりに教へしならん。すべて此記を見るに、道すが

らの名たゝる所は、ことごとく沙汰あれど、多磨川のことにおよばず、是らにてもおもひ合するに、多磨川と隅田川のあやまりより、武藏と相模の中とはかきしなるべし。(中略)殊に女のことなれば、教へしまゝをしるせしなるべし。

是も推測に過ぎないけれども、姑く一説に備へてよからう。ともあれ、こゝにあすだ川の名の見える事は注意しなければならぬ。又高田與清は「更級日記に、あすだがはとあるは、あもじ一字あまれるにや、夫木抄に雜八すだの河原とも、すだの渡ともよめり。義經記には三の巻反のすんだとも書たり。かゝればすみだとも、すんだともいふ、或はかよはし、或ははぶけることばにて、みな同じ心ばへになんありける。」と云つてゐる。併しアスダは必しも否定し難いであらう。それは又別

アスダに就いての私見

稱とも思はれるからである。スダがスンダとなり。更にスミダとなつたのが通稱であらう。今試にアスダの名の捨て難い由の臆説を附加しようと思ふ。天治本新撰字鏡に冊〔異本には冊とある由〕の字が見え、崩岸也と釋き、久豆禮クツレ又阿須アスの訓を載せてゐる。此のアスの語は、萬葉集卷十四に、安受アズ乃宇徹爾ノウツヘニとあり、又安受倍可良アズヘカラとあるアズに同じく、東歌アヅマウタに見える詞であるから、古くから東國の方言であつたと思はれる。それでアスダは此の語を含んでゐるのであらうと考へられるのである。故にアスダは却つて古くして、スダは後の略稱であらうかと察する。とにかく隅や角の字に拘つて、本義を解き難い事と思ふのである。

内裏名所百首

和歌の方面では、建保三年の内裏名所百首に角太河の題詠のあるのが顯著である。

今夜又誰が宿からんいほさきの角田河原の秋の月かげ

女

房〔實は順徳院〕

都鳥角太河原に船出しぬさしてとふべき人しなれば 行 意

水莖のあとかき流す角太河言つてやらん人もとひこす 定 家

たれこゝに角太河原の都鳥みやこ戀ひしきねのみ鳴くとも

家 衡

昔さそふ月は雲井に角田河はるかなしおもふ都を 俊成 女

都にてなれし月さへすみだ川言とふ鳥のうき音のみかは

兵衛内侍

月かげのさすやいほさき角田河越えてまつちの山のかひより

家 隆

なか／＼に我にこととへ都鳥すむや河邊の外はこたへむ

忠定

角田河なにしたつ鳥の都にはまつらん月を惜しむ山のは 知家
名にし負ふ鳥に言とふ角田河昔のなみのあとをとひつゝ

範宗

忘るなよなれのみこゝに角田河我が思ふことの鳥の名もうし

行能

渡守しばしやすらへ角太河ぬれぬといはゞ暮を待つらむ

康光

右には、庵崎や待乳山が皆河畔の名所として詠せられてゐる。

夫木和歌抄

夫木和歌抄には、すだの渡を下總として出して、左の歌が〔六に〕あ

る。

はる／＼とすだの河原をあさゆけば霞めるほどや渡なるらん

正三位季經卿

夕霧にすだのわたりはみえねども船人よばふ聲きこゆなり

源兼經朝臣

又同書〔二十〕に、

すみだ川昔はきかすいまこそは身を浮橋のあるよなりけれ

光俊朝臣

此歌は康元元年鹿島社に詣でけるに、すみだ川のわたりをみれば、かのわたり今はうきはしを渡したりければと云々。

浮橋とは船橋である。一遍聖人繪詞には石濱の橋の圖がある、それは

板橋である。其の地は今の橋場の邊であらうと云ふ。

又同書〔三十〕に、

せきやの里

いほさきのすみだ河原に日は暮れぬせきやの里にやどやからまし

光 俊 朝 臣

此歌は家集に云、康元元年九月鹿島社に詣でけるに、すみだ河のわたりにて、此わたりのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬれば、せきやの里と申、まへには海ふねもおほくとまりたりと云々。

關屋の里は、新編武藏風土記稿に、「按ニ今隅田川ノ對岸足立郡千住宿ノ内ニ關屋天神アリ、是關屋里ノ舊地ナリトイヘリ。」とある。

尙、個人の集に就いて檢するに、俊成卿文治六年五社百首に、旅、

俊成卿五社百首

壬二集

角田川古郷思ふ夕ぐれに啼音をそふる都鳥かな

藤原家隆の壬二集に、

旅の歌とて

渡守わたらぬさきに打隠せ隅田川原の鳥の名もうし

爲相卿千首に、

爲相卿千首

都には通はぬ鳥の隅田川名にしつびてもかひやなからむ

慶運法師集に、城鳥

慶運法師集

隅田川河霧ふかし都鳥ありやなしやとたどるばかりに

隆祐朝臣百番自歌合に、

隆祐朝臣百番自歌合

此世にはよしこととはじ角田川すみえぬかたの鳥の名もうし

榮雅千首は、躡中河

榮雅千首

第二篇 隅田川

行末の宿をばとはで隅田川すむなる鳥の名をしのびつゝ、

連歌

かやうに隅田川と云ふと、殆ど全く都鳥を配して詠んでゐる。因みに連歌に就いて思ひ出されるのは、宗祇法師が文明二年三月下旬の頃、隅田川原の近いあたりにしばし宿つて、連歌に志の深い人々と談話を交へて、吾妻問答を成した事である。又大永元年に成つた伊勢物語詞百韻といふ連歌には、「舟こそりてもよぶわたし守」の句が見えてゐる。亦逸してはならぬ。

北國紀行

更に他の方面では、堯惠法印の北國紀行に、左の記事を認める。

廿三日〔文明十八年十二月〕には角田川のほとり、鳥越といへる海村に、善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりしで、閑林にあがめける金光寺に在宿し侍。二月〔文明十九年〕の初、鳥越の翁艤して、角田川に泛びぬ。

東岸は下總、西岸は武藏野に續けり。利根入間の二河落合へる所に、彼古き渡りあり。東の渚に幽村あり。西渚に弧村有。水面悠悠として兩岸に等しく、晚霞曲江に流れ、歸帆野草をはしるかとおぼゆ。筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西に有て、絶頂はだへにきえ、裾野に夕日を帶、朧月空にかゝり、扁雲行盡て、四域に山なし。

浪の上のむかしをとへばすみだ川霞やしろき鳥の涙に

六月の末、角田川のほとりにて、遠村夕立、

雲わくるひかげの末も夏草の入間の里や夕立の空

初秋の比、よふかき道をくるに入間の舟渡りまで見送る人あまた
侍りしに、角田川の朝霧いづこをほとりともしらす。小舟の行遠

ふかひの音のみ身にしみて、哀に覺え侍しかば、彼翁方へ申送り侍し。

おもかげぞ今も身にしむ角田川あはれなりつる袖の朝霧

舟中の眺望を記すに、駢儷の體を以りて、文藻流麗を極めてゐる。右に見える鳥越の名は、今淺草區内に遺つてゐる。利根、入間の二河の落合ふ所に古い渡があるといふ文意は、古の水脈を回想せしめるものである。

廻國雜記

道興准後の廻國雜記には、淺草の里の石枕の傳説を叙べ、淺草寺に參詣する事を記し、さて「まつち山といふ所にて」とて歌がある。いかでわれたのめもおかぬ東路のまつちの山にけふはきぬらむしぐれてもつひにもみちぬまつち山落葉をときと木枯ぞ吹く

又、「あさちが原といへる所にて」とて、

人目さへかれてさびしき夕まぐれ淺茅が原の霜を分けつゝ

と詠じ、それから

斯て隅田川のほとりに到りて、皆々歌よみて、披講などして、古の塚のすがた哀れさ今の如くに覺えて、

古塚のかげ行水のすみだ川聞渡りてもぬるゝ袖かな

同行の中に竹筒サエを携へける人ありて、盃酌の興を催し侍りき。猶行々て川上に到り侍りて、都鳥尋ね見むとて人々さそひける程に、まかりてよめる。

こと問はむ鳥だにみえよすみだ川都戀ひしと思ふゆふべに

思ふ人なき身なれども隅田川名もむつまじき都鳥哉

やうく歸るさになり侍れば、夕の月所がらおもしろくて、船を

さしとめ

て、

秋の水

すみだ

川原に

さすら

ひて船

こそり

ても月

をみる



(雀戸江) 塚 若 梅

かな

などとある。右に梅若塚の事を言つてゐるのは、洵に注意しなければならぬ。萬里集九の梅花無盡藏に、隅田川の事を言つた詩（文明十七年十月廿六日の作）があつて、「隅田春色浪如花。鳥若知都我細問。」と賦した註に、「都鳥隅田之故事也。河邊有柳樹。蓋吉田之子梅若丸墓處也。其母北白川人。」とあるのを見ると、梅若傳説は既に其の頃著名となつてゐたのである。

謠曲隅田川

謠曲隅田川は實に此の故事に據り、伊勢物語を加味して成つたもので、勿論梅花無盡藏や廻國雜記以前の作であらう。此の曲の梗概は、梅若丸といふ童子が、人商人に誘拐せられ、都から奥州へ下る途中、隅田川の堤で煩つて失せた。母なる人、其の跡を慕つて物狂となり、

遙々こゝに尋ね來り、たま／＼其の一周忌に當る日、船中で事の由を
聽き、悲しみ歎いて、跡を弔つたところが、梅若丸の亡靈が現れ出た
といふのである。尙、全文を掲げて置かう。(子方 梅若丸幽靈、シテ
梅若丸の母、ワキ 渡守、ワキヅレ 旅人である。)

ワキ詞「これは武藏の國隅田川の渡守ワタシモリにて候。今日は舟を急ぎ人々
を渡さばやと存候。又此在所サイシヨにさる子細あつて、大念佛と申す事
の候間、僧俗を嫌はず人数ニンジユを集め候。其由皆々心得候へ

ワキヅレ次第「末も東の旅衣、／＼／＼、日も遙々の心かな。詞かや
うに候者は、都の者にて候。われ東に知る人の候程に、かの者を
尋ねて唯今まかり下り候。道行雲霞、あと遠山に越えなして、／＼
／＼、幾關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名に負ふ

隅田川、渡りに早く着きにけり。／＼／＼。詞急ぎ候程に、これ
ははや隅田川の渡りにて候。又あれを見れば、舟が出で候。急ぎ
乗らばやと存候。いかに船頭殿舟に乗らうするにて候。ワキ「なか
／＼の事、召され候へ。まづ／＼御出で候後アトの、けしからず物騒
に候は、何事にて候ぞ。ワキヅレ「さん候、都より女物狂ヲシナモノケルヒの下り
候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「さやうに候は、
暫らく舟を留トドめて、かの物狂を待たうするにて候。

シテサシ一聲「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷
ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳コトツて、行くへを何と尋
ぬらん。聞くやいかに、上ウヘの空なる風だにも、地「松に音する習ひ
あり。シテ「眞葛が原の露の世に、地「身を恨みてや、明け暮れん。

シテ「これは都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人ヒトアキビトに誘はれて、ゆくへを聞けば逢坂の、關の東の國遠き、あづまとかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり、思子オモヒゴの、跡を尋ねて、迷ふなり。地下歌「千里チヤトを行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌もとよりも、契假なる一つ世の、くくく、其中ウチをだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の四鳥の別これなれや。尋ぬる心のはてやらん。武藏の國と下總の中にある隅田川にも着きにけり。くくく。シテ詞「なうくわれをも舟に乗せて給はり候へ。ワキ「おことはいづ方よりいづ方へ下る人ぞ。シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ「都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には、乗

せまじいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ詞「げに、都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「なう其言葉はこなたも耳にとまるものを、かの業平も此渡りにて、名にし負はひ、いざこと問はん都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと。詞なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ。など此隅田川にて、白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「げにく誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕浪の、

ワキ「昔にかへる業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思妻、シテ「わらはも東に思子の、ゆくへをとふは同じ心のワキ「妻をしのび、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思は同じ、シテ「戀路なれば、地上歌「われも又、いざ言問はん都鳥、くくく、我が思子は東路に、ありやなしやと、問へどもくく答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とや云ひてまし。げにや舟競ふ堀江の川の水際に、來居つゝ鳴くは都鳥、それは難波江、これは又隅田川の東まで、思へば限なく、遠くも來ぬるものかな。さりとは渡守舟こそりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとは乗せてたび給へ。ワキ詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り給へ。此渡りは大事の渡りにて候。かまへて靜に召され候へ。ワキツレ「なうあの向

ひの柳の下に、人の多く集りて候は、何事にて候ぞ。ワキ「さん候、あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。此舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候。語さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が、此幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ。此幼き者をば其まゝ路次に捨て、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人々、此幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、さまざまに勞りて候へども、前世の事にも候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、いかなる人ぞ

と、父の名字をも、國をも、尋ねて候へば、われは都北白河に吉田の何某ナニガシと申し、人の、唯ひとり子にて候が、父にはおくれ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになりゆき候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此道のほとりにつきこめて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに申し、念佛四五返唱へ、つひに事終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に、舟が着いて候。疾うく御あがり候へ。ワキツレ「いかさま今日は此のところに逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうするにて候。ワキ「いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ、急いで

あがり候へ。あらあさましや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう急いで舟よりあがり候へ。シテ「なう舟人、今の物語は、いつの事にて候ぞ。ワキ「去年三月けふの事にて候。シテ「さて其兒チヤの年は、ワキ「十二歳、シテ「主ヌシの名は、ワキ「梅若丸、シテ「父の名字は、ワキ「吉田の何某、シテ「さて其後は親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ねこず、シテ「まして母とても尋ねぬよなう、ワキ「思ひもよらぬ事、シテ「なう親類とても親とても、尋ねぬこそことわりなれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にてはさむらへとよ。なうこれは夢かや、あら淺ましや候。ワキ詞「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あらいたはしや候。かの人の墓所ムシヨを見せ申候べし。

此方へ御出で候へ。

シテ「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さてもむざんや死の縁とて、生所を去つて東のはての、道の邊の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそあるらめや。地「さりとは人々此土を返して、今一度此世の姿を母に見せさせ給へや。上歌 残りても、かひあるべきは空しくて、くくく、あるはかひなき帚木の、見えつ隠れつ面影の、定なき世の習、人間うれひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。げに目の前の浮世かな、くくく。ワキ詞「今は何と御歎き候ひても、かひなき事、たゞ念佛を御申候ひて、後世を御弔ひ候へ。既に月

出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしす、むれば、シテ「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。ワキ詞「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、鉦鼓を母に參らすれば、シテ「我が子のためと聞けばげに、此身も鼻鐘を取上げて、ワキ「歎きをとめ聲澄むや、シテ「月の夜念佛諸共に、ワキ「心は西へと一すぢに、シテ二人「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛、くくく、シテ「隅田河原の波風も聲立て添へて、地「南無阿彌陀佛、くくく。シテ「名にし負はゞ都鳥も音を添へて、子方、地「南無阿彌陀佛、くくく。シテ詞「なうくく今の念佛のうちに、まさしく我が子の聲の

聞え候。此塚のうちにてありげに候よ。ツキ「われらもさやうに聞きて候、所詮此方の念佛をばとめて候べし。母御一人御申候へ。シテ」今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子方「南無阿彌陀佛、くくと、地」聲のうちより、まぼろしに見えければ、シテ「あれは我が子か、子方」母にてましますかと、地「互に手に手を取り交はせば、又消えくとなり行けば、いよくおもひはます鏡、面影もまぼろしも、見えつ隠れつするほどに、東雲シメの空も、ほのくくと明け行けば、跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫々として唯、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそ哀なりけれ。く

く。〔視世流改訂
謠本に據る〕

謠曲拾葉抄に曰く、

世傳、班女の謠に作る吉田少將、此墨田川に作る吉田の何某同人也。且又美濃國野上の宿の遊女花子も、此謠に作る狂女是も同じ人也。子二人あり、兄は梅若、弟を松若といふ。父の少將は身まかりぬ。弟松若は天狗にとらはれ、兄梅若は人商人にさそはれて路頭の土となる。母の心はいはん方なく哀れなる事共也。(中略) 梅若塚在三河東岸下總之地、梅林山木母寺とて有、本尊は阿彌陀也。かの柳の木は枯て朽木残れり。毎年三月十五日此寺において大念佛あり。又河のこなた武州の地淺茅原總泉寺の前に母の塚あり、云ニ妙龜山。此所に鏡の池と云所有、母梅若丸を尋來り、終に此池に身を投じて死すといへり、今は池もなし。

と。一體此の謠曲は何時頃作られたものであらうか。金春禪竹(世阿

彌宗全の掣の歌舞髓腦記には、既に其の名が見えてゐる。さうして謠曲通解には元雅（世阿彌の長男、長祿三年歿。）の作と註してゐるのである。此の曲が近世文學に影響した事の至大なのは、改めて後に述べよう。

東路の菴

偕又、宗長の東路の菴に、隅田川を通る事が見えてゐる。

隅田川の河舟にて、下總國葛西の庄の河内を半日計りよしあしをしのご折しも、霜枯は難波の浦に通ひて、隠れて住みし里々見えたり。鴛鴨都鳥堀江漕ぐ心地して、今井といふ津よりおりて云々。

東國紀行

葛西の入江といふのは、小名木川に當るとの説がある。それから谷宗牧の東國紀行〔天文十三年〕に、

角田川もみえわたるに、（中略）清閑多田こゝまで數日のおくりも

懇切なれば、（中略）袖ぬれがほなる氣色なきにしもあらねば、涙もろなる心弱さをまぎらはさむとて、

角田川舟こぞりはの長刀にあひしらひてぞふりはなれつる

といひつゝ、みやこのかたのみおもひやられて、岸ちかきなるもおぼえず、渡守におどろかされておりたり云々。

武蔵野の紀行

「舟こぞりはの長刀」と、面白い掛詞を使つてゐる。北條氏康の武蔵野の紀行に、

大澤の庄などを行くに、漸々すみ田川にもつきぬ。河づらを見れば、誠に白き鳥の、嘴と足と赤き鳥のむれゐて、魚をくふありさま、昔を思ひいでゝ、

都鳥隅田がはらに舟はあれどたゞその人は名のみありはら

むかひは安房、上總まのあたりに見渡さる。

木下長嘯子
の道の記

河畔の蒼茫として曠濶であつたことを記してゐる。豊臣勝俊即ち木下長嘯子の「はじめてあづまにいきける道の記」には、

角田川ちかしときゝて見に行く。今も舟にのれといふは、この渡守のくせにやあらん。

これぞこの東路遠く思ひこし角田かはらの渡なりけり

とはでたゞそれと頼まぬ角田川むれゐる鳥はあらぬなもこそ

と見えてゐる。

賀茂真淵の
文

近世名家の作では、賀茂真淵の「隅田川に船を泛て月をもてあそぶ序」が最も愛誦すべきものである。言詞が古雅で、いかにも情味が津々としてゐる。

いつはあれど、照る月の秋の盛、いづこはあれど、行く水のすみだ河に、夕波のふた國かけたる月見むとて、からやまとの文人、
絲竹にしもたへたるをつらねて、泛ぶることあり。舟は汐のまに
く楫ならずして上り、岸は舟のまにく居ながらにしてぞ移る。
岸遙かに晴れて、百のうてなに簾を捲き、風靜かに吹きて、千々の
舟の帷を動かせり。あるは陸、あるは舟、或はたかき、或はいやしき、
呉の舞妓、高麗のわざをぎ、色は波に匂ひ、聲は空になん澄みにける。
これやこの蘆荻を分けつる國にやあるらん。都鳥に言問ひける國にぞあるらし。
時のゆければ、かゝる都にしもなりにけることを、あるは目に喜び、
心に驚き、あるは酔なきしして今をほめ、歌しのびして古をなん語らひける。時に或人のいへらく、

我朝ミカドに隅田川てふ河こそ多げれ、打寄する駿河なる、大鳥の出羽なる、此武藏なるは、古の言の葉の集には、下つふさのあはひとかゝれ、後の道行ぶりの日記には、相模の境なりとぞ記しける。いでや月待つほどのなぐさめに、人々此事定め給はんなりといへば、あるが中に一人論ふ言は、夫古の集は後の人の筆を加へたるあり、後の日記は野らに向ひてしるす事あれば、據るべきものゝなづむべからざるをや。抑々蘆荻をや分けつらん。都鳥にや言問ひけん。蘆荻は人草繁からんさがにして、鳥の名は都とならんしるしにぞありけらし。しかあればかゝる都の内に流るゝ河をしも、絶えせぬ御代のためしにも引き、ふりにし名所のよすがにもいふべきなりけり。とこと終れば、待取りて物の音をわなゝかし、澄上る月に

嘯き出たる、いづれの所かはしかむ。いつの時にかは忘れまし。則ち舟舉りてかしこければ、今宵の有様のべつくすべし。唯我獨醉ふ。かゝれば何の心をかいはん。

わたつうみの夕汐のぼるすみだ川つきのそらまでふねも行か
ん

片玉集の女
流の文

それから片玉集（此は津村淙庵の編んだ和文の集であつて、其の抄本は太田南畝の三十幅に收めてある。）を手にすると、中に春光和煦の日に於ける河畔の遊樂を記した閨秀の文二編を認める。其の雅懐、其の才筆、女流文學として逸し難いと思はれるから、長篇ではあるが、そのまゝ示して置かう。

みどりをひろふ言葉

秀〔瀧恒
孝妻〕

東叡の山陰、根岸の里に庵しめて侍りしは、いかなる宿世深き契にや、はたかの里に何がしのぬしいませしに、その妻なるはらからともひとしきまじらひなし侍るも、げに淺からぬ宿世なりかし。春霞立そふ比より、わくらはのいとま□□青柳の蔭ふむ路よりはじめて、こゝかしこの花の陰にいざなひつゝ、猶もろともにみどりひろひ侍らばやなどかねごととして打過るほど、はや彌生も末つかたなりぬ。やゝとちむる春の名残しもいとゞしたはるゝに、はたこそ春、ある人のすみだ川の富士をうつしゑにせしを見侍りしが、さもよくに侍るにと物語りしもゆかしくて、けふしもかのわたりとはゞやとて、つとめて諸共に立出でぬ。駒形よりさゝやかなる舟して漕出けるに、やうく風吹出で波たち侍れば、人

々うしろめたしなどつぶやき侍るも、いと心ぐるし。かくてまさきなる岸にのぼりて、先稻荷の社こそとて詣で侍りしに、かたへのやすらひ所へのぼりて、しばしばかりかたらふ。むかひはすみだ川のながれに、秋葉、三圍とかや、さて見渡すけしき、またなきおかしさいはんかたなくて、

霞しく行方はそこわかぐさや木のめもはるの野べぞえならぬ日もたけゆけば、舟にてすみだ川の渡りこえ侍りて、夫より聞傳へし梅若山王とかやの社へ詣で侍りしに、何くれとあはれき限なし。

名にしおふすみだがはらの春にきて昔語を誰にとはまし

誰もさぞおなじこゝろにしのおらん名のみ残れる青柳のかげ

ちかきわたりの鏡の池とかや、人のをしへしかば、まうで侍りて、くもりなき名のみのかしてすみだ川かゝみが池は水草ゐにけりあはれさ諸共に思ひつゞけつゝ、又つゞみづたひにこゝかしこさまよふに、いとけなきわらはべをうなごなど袖引つれてみどりひろふさま、よそながら心ものどめあへで、いざ酒くまんとて、堤に休らひつゞみわたすさま、

すみがきにうつさまほしく野も山もひとつ縁に霞むはるけさなど思ひ續け侍るも、はや夕日のかたぶくに、霞のたえまより、名高きふじのね見えければ、

夕づく日かゝやきそひてすみ田川こゝにもふじの近く見えけりげに／＼たぐひなき詠ぞかし。彼物がたりしふですさみまで、い

みじう思ひ合さるゝに、みる／＼霞こめつゝ、暮ふかく成ゆけば、いざかへりなんと思ふも、なごりさへわりなくて、いかゞせんと詠わぶるかたはらに、いと心ありげなる刀自、山の山吹一えだをりて家づとにとて見せ侍るを、

手折りてし心ふかさは山吹の花のいろにも見えてゆかしきなど戯れごといひて打過ぐるに、遠近かけてめもはるかなる賤が垣根にいと白う見えしこそ又なきおかしさなれ。

心ある賤や住むらん山ざくらほのかに匂ふはなにかこひて

いと名殘惜しくて過行ほど、暮ふかくゆきかふ人も見えわかねば、秋葉、三圍なる御社にも詣です侍るこそいと本意なけれ。はたちかき日してまかで侍らんとかねごとしつゝ、彼の岸より棹さゝ

せて歸りなんとて、しばしがほど四方のけしき詠めしも、くれはてぬ水の面は、行きかふ舟もさだかならず、春のひねもすあくがれし名残のみやるかたなく、駒形なる岸につきぬ。夫よりたゞけふの名残のみしたはれつゝ、このまゝ怠りがちに過さば本意なし、ありがたくと〔くとは〕いとま待ちえて、今一たびとひゆかんと舟長に契るも、せめてわりなき身のこゝろにまかせぬくりごとなるべし。なほ夢にだにさだかならず、あかぬおかしきなごりのみ、諸共にしたひ侍りしぞいとく口惜しきや。

都 鳥

さよ〔佐藤 徳明妻〕

としさりとしくれど、花のかげのみおぼつかなく、野邊の小草の色も見ず、くれゆく春は惜しめども、いたづらにのみ打過るを、

ことしばかりはと思ひおこして、親しうなれむつぶ秀子のおもとと、ひと日もろ共に出立侍りぬ。淺草川より小舟に打乗りて、いづこをさしてゆくともなく漕出づるまゝに、川つらのけしきそこはかたなく霞みわたり、水のおもてうらくと、いはんかたなくのどやかにみゆ。名ある寺社などひだり右に見て、打過侍るに、風もやうく吹きそひゆけばにや、程もなく眞崎とかやの岸につきて、近きやどりに休らひつ詠むれば、ゆきかふ人のさまかたちもことにおかし。いたうゑひすぐいたるにや、をのこをうなみだれありく。川よりをちは野べのけしきも青み渡り咲くまゝ、淺茅の花も色香は分かねど、ほのかにみゆるはいとおかし。すみだ川のわたり、木深き森のたゝすまひも、霞のなかにこぐらうみゆ。い

とゞありやなしやとたどられて、人々日たけぬと急げば、心あわたいしく、はた舟えてむかひの岸にいたる。へだてしよりも目に近きは見所おほく、かのわかざりしは董小草などの花の咲満ちたる也。堤のあなたはいつことしらねど、田面はてしなう打續き、しづが苗代水せきて、こゝかしこにいとなむあせの通路あやしうほそう、ようせずば落ちぬべき道の所々引續きて、遠く見渡さるゝに、いつしか霞はよそに立つゝきて、はるかなるけしきえもいはす。

打續く野田も澤田も眺めやるはては霞にたゆるはるけさかくみること心とまりて、この堤をこゝかしこあくがれありくに、花は皆散過ぎて口惜しき陰ながら、青葉の木末にほひのと

まれるもあかすをかしうみゆ。しづが垣根のまばらに、八重山吹などの手折すさびしく〔てしくは〕はかなう残れるも、所につけておかしとばかりやすらひて見るまゝに、げに昔の人もいみじうめでおきけんかはづらのさまにも、先にしへのみしのばれて、

都鳥こゝにいくせをすみだ川今も昔を人や言問ふ

隅田川こゝにいくせをふる里の春をもよそにみやこ鳥かな

また遙につたひて打見かへれば、分けぬる道の跡もなく、いづくも同じ田面にみわたさるれば、

とひわびぬ川添ひ小田もひとつにて我がこし路はありやなしやと

など口すさびつゝ、まづ梅若の御社にまうでんとて、人々も急ぎ

つきぬ。かどさしいるより、いとほあれに心しめり、こと所に似ず物わびしう、打見るにまづ涙ぐまる。

つたへ聞く古き昔のあはれさもたゞ目のまへの涙なりけり
かのしるしの柳も朽ちはて、切捨てし木の枝のやうにて、いさゝかのこれり、

残しおく古枝の柳くちはて、しのぶ昔やうとく成なん
立並ぶ一本に、はるのみどりのこゝちよげにうらくと風に打靡きて、古忘れがほなるもあはれに、

しるしとて淺るもひさし緑そふよゝにふりせぬ青柳の影
かの御社のさまげにはたあはれに、近きわたりのをのこにや、多く集りてかねうちならし行ふねぶつの聲、いとあらゝかにきこゆ

るもあはれ也。こゝにもしばしとて打休らふまゝ、たゞ此川岸によする波の音もあやしう、昔のみしのばしく、

古き名を世々につたへてすみだ川よりくる波も名にや立つらん人々かへさにおもむくべしなど、さゝやきあへるを、かゝる折からは、鏡が池のあはれを知らまほしなど、此のおもともいふにぞそゝのかし伴なふ。はたこゝもとなる池のさま也。

うつる世の今も鏡が池の名に人の立寄るかげは残れり
うつり行く世の末までも影残す鏡がいけとみるもこひしき

あはれ盡きせず、いざさらばとて、又かの堤をつたひきて、わらふだしきて、酒などくむほど、散りにし花の木陰にも、千代經ぬべき心地して、さらにかへらんことも思はず、めづらしきところへ